産炭地研究会
JAFCOF Japan Association for Study of Former COalFields

JAFCOF 釧路研究会
リサーチ・ペーパー vol.15

尺炭教育史

尺別炭砿地域における独創的な教育実践の記録

笠原　良太　早稲田大学大学院文学研究科

kasa.ryota@gmail.com

2018 年 10 月 1 日

目次

１．　はじめに 1
２．　尺炭教育の萌芽――戦前の尺炭小と紅林鐵雄校長 2
２－１．　尺別尋常小学校特別教授場時代 2
２－２．　尺別炭砿尋常高等小学校時代 4
３．　尺炭教育の確立：戦後～1950 年代――尺炭小、尺炭中、音別高校 6
３－１．　尺炭小の教育――紅林晃校長、社会科教育研究、PTA 活動 7
３－１－１．紅林晃校長――父、鐵雄氏の理念継ぐ 7
３－１－２．本田清氏主導の社会科教育研究――グループ学習の導入 8
３－１－３．社会科研究指定校としての実践 9
３－１－４．PTA 活動――父母の学びの場としての尺炭小：社会学級、一日入学 12
３－１－５．地区懇談会・子ども会、後援活動 13
３－２．　尺炭中の教育――尺炭小教育の連続性 14
３－２－１．「芋こじ式」教育――草創期 14
３－２－２．教育研究 15
３－２－３．PTA 活動 16
３－２－４．進路指導 17
３－２－５．階層差別に関する教育・指導 18
３－３．　尺炭教育の発信と研鑽――町内教育研究所での尺炭小・中学校教員の活動 18
３－３－１．研究所の発足 19
３－３－２．教育研究活動 20
３－３－３．調査研究、資料集等発行、児童生徒中心の活動促進 23
３－４．　音別高校――地元の要望による定時制高校 24
３－４－１．釧路湖陵高校分校（音別高校）の設立 24
３－４－２．音別高校の教員たち 25
３－４－３．主体性を重んじる教育 26
３－４－４．音別高校の閉校 26
4．　教員闘争と炭鉱衰退のなかの尺炭教育:1960 年代――集団主義教育と地域共闘 27
４－１．　尺炭小における集団主義教育――教師・児童集団の変革を目指して 28
４－１－１．職場づくり――生活職場サークルの活動 28
４－１－２．学級・学校づくり――学級づくりサークルの活動 31
４－１－３．地域共闘と父母提携――父母提携サークルの記録を中心に 35
４－１－４．校内詩集『でか・ちび・のっぽ』 37
４－１－５．高沢慶次郎校長と教師集団 39
４－２．　尺炭中における集団主義教育――学級づくり、生徒会活動、計画学習 41
４－２－１．学級づくり 41
４－２－２．生徒会活動 43
４－２－３．計画学習：テスト・成績主義への対応 45

４－２－４．「絶対評価」の通知表 48
５．　閉山、閉校にかけての尺炭教育 48
５－１．　閉山直前の尺炭小――創立 50 周年記念式典、さらなる発展を祈って 49
５－２．　閉山直前の尺炭中――継続される集団主義教育 50
５－３．　閉山から閉校にかけて 51
５－３－１．尺炭小教員たちの対応 51
５－３－２．尺炭中教員たちの対応 52
６．　おわりに 53
謝辞 55
参考資料・文献 55

１．はじめに

本報告書は、尺別炭砿地域で展開された教育、「尺炭教育」の実態を明らかにすることを目的としている。われわれの研究グループは、これまでに尺別炭砿で暮らした人びとを対象におこなった質問紙調査やインタビューのなかで、尺別炭砿小学校（以下、「尺炭小」）ならびに中学校（以下、「尺炭中」）時代の生活や経験についてうかがってきた。そこでは、多くの同窓生が当時の学校生活や教員との思い出について鮮明に回答している（2016 年東京尺別会調査の結果については、嶋﨑ら（2016）参照）。彼らにとって、尺炭小・中学校時代の経験が重要な意味を持っており、われわれは、尺別においてどのような教育がなされていたのか把握する必要があった。

そこでわれわれは、尺炭小・中学校に関する文書資料の収集と両校で教鞭をとった元教員たちへのインタビュー調査を実施した。2018 年８月までに収集した文書資料および調査の概要は、表１、２の通りである。もちろん、これらは氷山の一角に過ぎないが、これらの資料から「尺炭教育」の特徴が浮き彫りになってきた。「尺炭教育」は、単に尺炭小・中学校で展開された教育実践を意味するだけではなく、釧路管内の教育をリードし、道内においても注目される教育であった。

たとえば、1957（昭和 32）年に深川市で開かれた「第４回全道 PTA 研究大会」に提言者として参加した箱崎金三郎尺別炭砿小学校校長は、同大会研究誌において、つぎのように紹介されている。

> 「尺炭教育」としてユニークな実践が高く評価されている釧路尺別炭砿小学校校長、かつまた釧路連 P 事務局長として地区 PTA 活動の推進力となっているこの道のベテランでもある。（北海道 PTA 連合会編 1957: 18）

このほか、釧路や全道の教育研究大会等で、「尺炭教育」は、独創的かつ先進的な教育実践として注目された。では、具体的にどのような教育がなされていたのだろうか。そして、なぜ道東の山間にあった尺別炭砿地域で、そうした独創的かつ先進的な教育が成立可能だったのだろうか。本報告書では、上記の資料を時系列に整理し、「尺炭教育」の成立と変容過程を明らかにする。

表１　尺炭小・中学校に関する文書資料一覧（2018 年８月現在収集分）

	資料名	発行年	著者･編者
尺炭小	『職場史』（1-2）	1965,66	尺別炭砿小学校
	『でか・ちび・のっぽ』	1966	でか・ちび・のっぽ編集委員会
	『風雪八十有余年――涙と感激の自叙伝』	1967	紅林鐵雄
	『尺炭小 50 年の足跡』	1969	開校 50 周年記念誌編纂委員会
	『尺炭小沿革の概要』	1970	尺別炭砿小学校
	『この空に虹をかけて――ある校長の記録』	1978	高沢慶次郎
	『紅林晃遺稿集』	1988	紅林晃遺稿集出版会
尺炭中	『あこがれ』（4, 10-12, 18）	1956,62-64,70	尺別炭砿中学校生徒会
	『開校 10 周年記念誌――10 年の歩み』	1957	尺別炭砿中学校
	『地底の灯――尺別炭砿中学校廃校記念誌』	1970	尺別炭砿中学校
	『還暦故郷の旅』	1995	尺別炭砿中学校第４期同窓会
	『尺別炭砿中学校 30 周年記念誌――あこがれ』	2000	記念誌編集委員会
音別 釧路 全道	『教育研究集録』	1954	釧路國教育研究所
	『道 P シリーズ第３集――第４回 PTA 研究大会誌』	1957	北海道 PTA 連合会
	『町研のあしあと――音研史』	1961	音別町教育研究所
	『釧路の教育 7 集』	1963	釧路教育研究所
	『灯をもやしつづけて――釧民教 20 年の軌跡』	1983	釧路民間教育研究団体連絡協議会
	『よみがえる群像――音別高校 11 年のあしあと』	1988	北海道音別高等学校同窓会
	『釧路教育研究所創立 50 周年記念誌　想』	1999	釧路教育研究所

表２　尺炭小・中学校教員インタビュー調査概要（2018 年８月現在）

	対象者	勤務年	インタビュー実施日	場所
尺炭小	木幡　一夫氏	1955-63	2017 年 3 月 8 日	恵庭
	坂野　寅雄氏	1959-66	2018 年 7 月 29 日	札幌
	渡辺（大山）良子氏	1963-67	2018 年 3 月 19 日	釧路
	坂野（藤田）悠起子氏	1963-64	2018 年 7 月 29 日	札幌
尺炭中	市橋　大明氏	1947-62	2017 年 7 月 16 日 8 月 25 日 2018 年 3 月 20 日	音別
	村雲　忠夫氏	1955-69	2017 年 3 月 18 日 2018 年 8 月 11 日	釧路
	編田　文男氏	1962-67	2017 年 3 月 9 日	札幌
	川端　紀一氏	1963-70	2018 年 3 月 18 日	釧路
	松実　寛　氏	1967-70	2014 年 8 月 1 日	釧路

２．尺炭教育の萌芽――戦前の尺炭小と紅林鐵雄校長

２－１．尺別尋常小学校特別教授場時代

尺別出身で、戦後、長きにわたり尺炭中で教鞭をとった市橋大明氏は、「(尺別炭砿）中学校のよいところは、尺別炭砿小学校の歴史が生んだよさだと思います」と語る。「尺炭教育」としてまず想定されるのは、尺炭小の諸実践であったという（2018 年３月市橋氏インタビュー)。そこで、本節では、尺炭小の初代ならびに第３代校長を務めた紅林鐵雄氏の回想を主な資料として、戦前

の尺炭小草創期から「尺炭教育」の萌芽を探る。

尺別炭砿小学校の歴史は、尺別炭砿の歴史とともにあった。尺別炭砿が 1918（大正７）年に開砿し、北日本鉱業株式会社によって開発されると、「それまでは全然１人も住まない巨木の生い茂った山奥であったところに」急激に従業員が増加した（尺別炭砿小学校 1970: 13）。そこで、同社は「従業員のために臨時バラック式の校舎一棟と教員一名を自供（ママ）した」が、「私立認定が中々むずかしいので」（紅林鐵雄 1967: 76）、1919（大正８）年に尺別小学校（尺別原野）校長の紅林氏が同特別教授場の校長を兼任する形で「尺別尋常小学校特別教授場」が発足した。

紅林鐵雄氏は、地元白糠郡内で教育的理想の実現に奮闘した教員であった。尺別尋常小学校特別教授場の校長兼任にあたっては、「この奥地の学校まで管理指導するという立場に直面し少なからず衝動を受けたものの」、「間接指導の外毎週１回は現地指導を行った」（紅林鐵雄 1967: 76）。ただし、紅林氏は、炭鉱マンの「粗暴」な気質ゆえに、開校当初の学校教育が困難であったと振り返る。

> その頃の炭礦マンは今と異って生ッ粋の坑夫根性で、「ガスがどんとくりや二千両」の歌の文句の通り明日をも知れない坑内生活に気が荒く、その血や環境に育った子ども等も粗暴その者で、この特別教授場に勤める先生も２年とは居続かないで随時交代したものだった。（紅林鐵雄 1967: 76）

また、児童数の増加にともない、こうした特性が強勢された。開校当初、15 人だった児童数は、４年後の 1923（大正 12）年には 200 人を超え、児童の「悪い面のヤンチャ振りも増長し」た（紅林鐵雄 1967: 76）。そこで、会社は「つ手を求めて元秋田県師範出の退職老校長とそれに精鋭の若手教員２名を招聘して専ら校風刷新と教科の高揚に努め」たが、「児童の性能からか、教育の効果」は上がらなかった（紅林鐵雄 1967: 76）。秋田県師範学校出身の先生の授業では、「子供等の無軌道ぶり、先生のお話やチョークを見ているものは一教室 10%ぐらい、あとは我儘勝手な行動」が見られたという（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 8）。

こうした環境下で、子どもの教育に理解のある一部の父兄は、自分の子どもを「『是非こちら（引用者注：尺別小学校、本校）へ入れて呉れ』」と紅林校長に嘆願した。彼らの決意は固く、紅林氏も「ついほだされて許して仕舞」い、尺別小学校への入学志願者が次から次に増えた。転校生たちは、「何れもと云ってよい位成績の良い方」であり、炭鉱地区から原野まで「里余の道を徒歩往復」までして通学した（紅林鐵雄 1967: 76）。

しかし、紅林氏は、劣悪な環境であった特別教授場を見捨てるのではなく、「必ず砿山（やま）の教育ムードを一変させ他砿山にひけを取らぬまでに向上させる！」という思いで、「家庭即ち保護者の輯睦精神涵養」に努めた。そこで紅林氏は、友子制度に着目し、「これをあくまで善用して全山和合を図る等々、実施のための友子の吉凶禍福の慶弔顔し、慰藉激励等」を行った（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 8）。さらに、尺別小学校で運動会を開催し、炭鉱の人びとにとって楽しみの年中行事を創出した。こうした結果、５、６年経つうちに、「大ぶ砿山の空気は和いで人々の親密度も大いに加わって来た」（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 9）。

２－２．尺別炭砿尋常高等小学校時代

紅林氏は、1928（昭和３）年[1]に特別教授場の校長職を辞したが、その後も「手塩にかけた学校の将来を思い能う限り外所の労を積んだ」（紅林鐵雄 1967: 81）。特別教授場は、1931（昭和６）年に「尺別炭砿尋常小学校」と改称し、独立した。翌年には校舎を新築移転し、さらに、「父兄並に地元側の強い要望から」（紅林鐵雄 1967: 81）、1933（昭和８）年に高等科を併置し、「尺別炭砿尋常高等小学校」と改称した。紅林氏は、本科生教員資格（「小本正」）を有していたため、再び同校の校長に赴任した。彼にとって尺炭小は「特別教授場開設当時よりの因ねん深く（生徒も父兄も殆ど知りつくしていた間がら）」、「安心して着任出来」た（尺別炭砿小学校 1970: 14、括弧内は原文ママ）。「全山校下父兄生徒児童も」「『今度は直接の校長だ』」と紅林氏の尺炭小着任を歓迎した（紅林鐵雄 1967: 86-7）。当時は「５学級の複式校」で、「管内に誇る近代建築」の校舎であり、紅林氏自身「とても教育上明るくて、美しい意識が湧いて止まなかった」（尺別炭砿小学校 1970: 14）。「当時の尺炭父兄の教育熱意は高く児童間の競争、父兄の学校に対する態度など相当に厳しいものがあった」が、紅林氏は、この「昂揚している父兄の教育熱を善転」させるため（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 8）、「チームワーク、先ず職員５人、給仕１人の融和、300 名児童生徒の親睦、更に師弟間の愛情、家庭との連絡協調、会社主脳部との交流、労務者との親近等々」、「和をモットーとする教育信念」を持った（紅林鐵雄 1967: 87）。そして、自身も担任を持ち、主席訓導の松田正雄氏（函館師範専攻科卒）、次席の土谷隆氏（旭川師範第１回卒）、特別教授場時代からのベテラン松井ひさえ氏、斉藤綱夫氏（札幌師範新卒）という「何れも新進気鋭」（紅林鐵雄 1967: 87）の４人と「スクラムを組んで一生県命生徒の育成に励んだ」（尺別炭砿小学校 1970: 14）。

こうして独立校としての歩みを始めた尺炭小であったが、特別教授場時代にみられた炭鉱労働者世帯特有の気風は残存していた。紅林校長はじめ教員たちの目下の課題は、そうした「弊風」の改めであった。

> 校外としては、父兄の大半は坑内労務員＝当時坑夫＝で職業と伝統精神からか、自ずと殺伐の気風が強く、飲酒の上暴行沙汰など頻々といった有様、更に加えて労使の隔たりが甚しくて上司からの叱咤や打擲など珍らしくなかったし、またそれを不思議ともしない社会であったのだ。また同じ経営者でも、いわゆる階級意識が実に強く、いわば軍隊式の匂いさえもしたのであった。私は眼のあたり此の状態を繰り返し目撃することにより一種の人道観も手伝って、能うだけこの弊風を改めなければ真に敬愛する教育もできねば平和な郷土を作り上げることは不可能と感じ、経営者側主脳部とも努めて接触して不言の裡にも愛情精神の鼓吹、また労務者側にも平常の家庭訪問の外にも吉凶禍福ある毎に之を慶弔して、相互の交情と友愛精神の啓倍に努めた。また礼儀は人間最高の美徳であることとを児童生徒を通じて実践せしめ、これが曳いて全山のムードを作りあげたのは云うまでもない。（紅林鐵雄 1967: 87）

このように紅林氏は、教員間の連携、家族・炭鉱会社との協調、児童生徒に対する教育実践を

[1] 尺炭小 50 年史の年表では昭和３年（尺別炭砿小学校 1969: 33）、自伝では昭和６年となっている（紅林 1967: 86）

重視し、「弊風」の改善と「平和な郷土を作り上げること」を目指した。この時点からすでに、「尺炭教育」の礎となる「父母の集団づくり」や学校を中心とする「村づくり」の発想が生まれていた。

こうした紅林氏の教育実践を可能にした要因の一つとして、炭鉱会社の理解が挙げられる。特に、当時の砿長が教育熱心であったことが、全山気風の純良化に貢献した。

> 当時の砿長（所長代理）池田芳太郎氏が、非常な教育熱心家で、選ばれて保護者会長に任ぜられ、更に拍車をかけての学校後援ぶり、多忙の中をさいて、随時学校訪問をされ、何くれと協力されたことは、特筆に価します。砿長陣頭指揮の後援ぶりであったため、校下父兄も殆どが学校中心主義よく（私）どもの教育方針には無条件＊感を表せられたのは、感銘の至りであった。（尺別炭砿小学校 1970: 14、括弧内は原文ママ、「＊」は不明）

さらに、池田砿長は教員らの俳句会に積極的に参加し、従業員はじめ「全山同好の人に」参加を勧めた（紅林鐵雄 1967: 88）。「会員の顔ぶれは礦長始め職員では課長、係長、労務者では坑内夫あり外勤夫あり、医師、郵便局長局員、請負師、鉄道職員、それに私共学校の教師等々で千差万別」であり（紅林鐵雄 1967: 88）、池田氏は、全山の人びとと交流を深めた。これにより、「全山リーダー」としての池田氏のイメージが変化し、ひいては学校・家庭の緊密度を高めたと紅林氏は振り返る。

> （俳句会は）和気靄々集会時の雰囲気などよその目も羨ましい位の和やかさでいささかの階級意識や差別意識など更に見当たらない。（中略）池田さんは生一本の性格の上に全山リーダーの責任者という古い資本家型の行動は悟かにあったようであるが、俳句精進とそのグループの融和ムードからすっかり以前のワンマン型から脱皮して温情型協和型と変わってしまい側近否全山の人々を驚かせもしまた畏敬と親近感を深めたのは大きな収穫であった。と共に学校保護者会の方の運営や学校に対する協力面のプラスは実に大きなものであり、私の前任校、尺別校の時のような学校家庭共流れの雰囲気を作り上げたものであった。（紅林鐵雄 1967: 88）

このように、紅林氏をはじめ教員らの文化活動は、地域の中心的な活動となり、全山の人びとや各種組織を統合する役割を有した。その結果、全山の気風改善、階級意識の切除、融和ムードが醸成されていった。特別教授場時代からみられた「気風の荒さ」は、次第に改善され、子ども、父母の間に礼儀が定着していった。定着した具体例として、紅林氏は、「雄別炭砿所長の川浪氏御夫妻が」来尺したときのようすを挙げている。

> （所長夫妻が）停車場で汽車を降り立たれた時、出迎えの職員の敬礼はさることながら、ホームを出て礦業事務所までの道中約二粁近くまでの間に出会う人々が大人も大方は子供（学童）は殆んどといってよいほどこの礦長一行に対して正しく礼をして行くのを、いかにも不思議そうに見守った所長御夫妻が「どうして尺別はこう礼儀が正しいのか？」に出迎えの池田礦長さんが「これは学校の教育方針で家庭もこれに同調しているのです！」と答えたら、

件の川浪御夫妻が感嘆の声を洩らして「我が雄別にも見せてやりたい！」と述べられとか…。（紅林鐵雄 1967: 88-9）

紅林氏は、のちに尺別を「炭砿地とは思えぬほどの教育中心の平和郷」（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 9）とまで呼んでいる。

また、家庭の教育理解は、授業参観のようすからもよみとれる。戦前、同校の児童であった市橋大明氏（1931～37 年在学、のちに尺炭中勤務）は、当時の父母たちの教育に対する理解、関心の高さを以下のように回想している。

私が小学生のとき、お母さん方が学校参観日に全員来ました。隣り近所を誘って来たのかもしれませんが、学校教育について、お母さん方が大変関心を持っていた証拠だと思います。オフクロが来る授業参観というのは、子どもも緊張してしまいます。（中略）そのくらい、学校に対する地域の人の関心というのは、昔から高かった。それは、戦後のことではありません。僕が小学生のときから、そうでした。（2017 年 7 月市橋氏インタビュー）

このように、尺別における父母の学校教育への関心は、戦前から高かった。教員たちは、「この好条件の環境に応えて」「最大限度のベストを尽くした」（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 10）。

こののち紅林鐵雄氏は、1936（昭和 11）年に児童生徒ならびに父母らに惜しまれながら、音別尋常高等小学校へと異動した。彼は、「学校－家庭－社会」の連帯という教育的理想の実現を目指して、37 年間、地元白糠郡内の小学校に勤めた。そのうちの 17 年間を尺炭小のために充て、父母、会社を巻き込む形で教育的理想を実現していった。紅林氏を中心に築き上げた地域ぐるみの学校教育は、次節でみるように、戦後も継承されていく。

３．尺炭教育の確立：戦後～1950 年代――尺炭小、尺炭中、音別高校

戦前、尺別炭砿が拡大するとともに、尺炭小の児童数も急増した。尺別炭砿は奈多内坑の開坑（1935 年）、選炭工場ならびに尺浦隧道の完成（1942 年）など拡大し、尺炭小は 1941（昭和 16）年に国民学校となり、児童数 684 人、14 学級となった。1944（昭和 19）年の急速転換[2]により児童数は減少するが、1946（昭和 21）年の尺別炭砿復興後、増加した。教員たちは、樺太からの引揚者や本州からの移住者など、多様なバックグラウンドを抱えた大量の児童生徒を統括する必要があった。尺炭小の教員たちは、精力的な教育実践・学校運営を展開し、道内でも有名な学校として位置づけられていく。一方、新たに設置された尺炭中では、教員たちが初等中等教育定着のため尽力した。「尺炭教育」は、戦後から 1950 年代にかけて定着・確立していく。

本節では、まず戦後の尺炭小がいかに戦前の教育を継承しながら展開したのかを概観し、つぎに戦後の新制により発足した尺炭中の教育をみていく。

[2] 1944（昭和 19）年８月に「樺太及釧路に於ける炭砿勤労者、資材等の急速転換の件」が閣議決定され、「釧路炭田や樺太の炭鉱を保坑・休坑とし、労働力と資材を筑豊・三池・常磐炭田に集中させ、釧路からは約 6,000 名もの炭鉱労働者が九州へ移動した」（石川ほか 2012: 49）。

３－１．尺炭小の教育――紅林晃校長、社会科教育研究、PTA 活動

３－１－１．紅林晃校長――父、鐵雄氏の理念継ぐ

1946（昭和 21）年、紅林鐵雄氏の子息、晃氏が尺炭小第６代目の校長として赴任した。晃氏は、尺炭小赴任前からすでに、音別や標茶、雄別で教鞭をとり、「地域ぐるみでの教育」を目指すなど、社会教育家としての素地を形成していた（佐々木 1988）。尺別炭砿復興前の尺別について、晃氏は、「生産のない社会はどれほど暗く、そして精彩を失っている人間の社会かということを」感じた（紅林晃 1981: 63）。そこで彼は、教育によって子どもたちに希望を持たせ、活力あるコミュニティづくりを目指した。それは、教育を通して炭鉱社会の気風を改善させた父、鐵雄氏の理念に通じるものがあった。

> 子ども達は、戦局がどうなろうと国の状態がどうであろうと、明日に自分の夢をたくして、お腹をすかせながら学校に通ってきます。この子ども達を当時の全職員が「おはよう。おはよう」と言って迎え、「活力ある郷里をここでつくっていくのだ。新しいコミュニティづくりは、教育がその主導権をもたなければならないのだ。お父さんもお兄さんもまだ帰ってこない。お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、そして子ども達しかいないこのコミュニティの中で、子ども達の明日への希望を持たせるのは教育なのだ。しかも、この郷里に明日をつくるのが教育なのだ。」こういう自負心をもって一丸となって頑張りました。（紅林晃 1981: 63）

上記のような自負心と理念のもと、教員たちは、「火の玉になって新しい教育のために、あるいは新しい日本の進路に向けて」尽力し、「炭鉱の町の火が消えていた中で、教育の火は燃えあがり、子ども達も私達教師も鍛えられた」（紅林晃[1981]1988: 63）。

当時の尺炭小には、夕張出身で生活綴方教育に長けていた千葉良雄氏（教頭）や旭川師範学校出身の本田清氏といった中心的教員のほか、炭山に育ち炭山が初任地となった岩崎彰氏などがいた（紅林晃[1981]1988: 63）。特に、新任の岩崎氏に対する校長の期待は大きく、「新学制、新教育、新しい児童観、カリキュラム、ガイダンス、新しいプログラム。（中略）フレッシュな表情に新生していく教育の転機を」求めていた（紅林晃[1948]1988: 18）。岩崎氏は、「よき先輩、千葉、本田両学級の逞しい理論と実践に列びながら、自らの実践を拓いてい」き、校長の「期待を超えて進んでいった」（紅林晃[1948]1988: 18）。晃氏は、岩崎氏の教育実践から、「尺炭教育」の新たな展開を見出している。

> 「教師自身のアクティブティをぬきにして、一切の教育も新しいこどもの生活も考えられない」。それは彼にとって観念の了解ではなかった。５月、６月、新卒教師の実践は萌え開く新緑のようにフレッシュな活動を展げていった。「結ばれる心と心」「生活を展げる子等」と終日子供の中にうもれて、次を指向する実践行動は新しい波紋を繰り出して、子供から子供へとその輪をひろげていったのである。「自らの感ずる要求が努力の動力となる。」という子供の心理を、この教師はその新鮮な感覚と行動のうちに解決していった。（中略）現実の児童に即し、この教室、この集団構成に喰い込んで、巧みに興味と必要を整えながら、そのプログラムを書き続けていった処に、この教師の仕事の確かさがあったと言えよう。「よく結ばれ

ている」と思う私の爽やかな工程は、この危機の中に新卒という肩書の一人の誠実な教師によって示された新しい教育への肯定でもあったのだ。（紅林晃[1948]1988: 18-9）

このような、「結ばれる心と心」や「生活を展げる」という集団主義的側面は、以後、尺炭教育の一つの特徴となっていく。こうした各教員の実践をもとに、尺炭小では、「“生活” をテーマに」「自分たちで作り出す教育」、「創造と工夫の教育」を進めていった。当時、各種教育設備、教材等が不足していた中で、尺炭小では「手造りの道具で子ども一人ひとりに合ったカリキュラム」で教育実践にあたった（紅林晃[1981]1988: 63）。晃氏は、自らの手で「カリキュラムの権威の先生を」呼び、指導を受け、尺炭小の教育実践を推し進めた。

３－１－２．本田清氏主導の社会科教育研究――グループ学習の導入

とりわけ、尺炭小が力を入れたのは社会科教育研究であった。戦後、従来の「修身」、「公民」に代わって「社会科」が新設され、アメリカのコミュニティ・スクール理論を汲んだ「社会科を中心とする curriculum 構成が盛ん」になった（清水 1960: 55）。道内においても、1940 年代末から師範付属校を中心に展開され（木全 1984）、道東では尺炭小がその中心であった。当時、尺炭小の教育実践を主導していた一人に、前述の本田清氏を挙げることができる。本田氏は、1949（昭和 24）年に釧路管内で唯一の「北海道小学校カリキュラム連盟」の常任委員を務め、尺炭小に限らず、釧路の社会科教育研究を牽引した。

では、戦中・戦後の尺炭小において、本田氏は具体的にどのような実践をおこなったのだろうか。当時の尺炭小での教育について、在学生であった鰐淵俊之氏（1942-7 年に在学、のちの釧路市長）は、以下のように回想している。

> （小学６年時）担任の本田先生は旭川師範出身の若手の教師でなんでもできる優秀な先生であった。そして実に熱心に私達を指導した。まず、先生はグループ学習を重視され、机もそのように配置した。そして各グループにリーダーを置き、そのリーダーを中心に学習が進められた。グループの中に理解の遅い者がいれば、リーダーの責任と指導で分かるまで学習を進めるというやり方だった。しかも学習の方法も生活を重視して勉強するいわゆる生活単元学習であった。暗記を中心にして知識を習得する系統的な学習方法とは違っていたと思う。こうした学習の仕方はグループ別にみんなのレベルを上げていくねらいをもっていたので、学習のテンポは遅かった。（鰐淵俊之 1995）

同じく、当時尺炭小に在学していた木幡一夫氏（1940-46 年在学、1955-63 年尺炭小教員として勤務）によれば、「本田先生がおこなったグループ学習は、単なるグループで話し合ったり、学習するのではなく、グループ全員の責任といったもの」であり、「生活での落ち度やさわいだりした場合、みんなの責任として反省したり、こぶしを作り自分の頭をなぐることも、しばしば」であった。さらに、「子どもたちに実験させて、気温が何度になると水が氷るかなど結果を発表させ、『子どもの広場づくり』の始まりとして、長屋の横の空き地に、高跳び場を作ったり、長屋の壁を利用し、図画・習字の作品を掲示するなど、子どもたちの学校活動や成果を発表させる機会があった」と振り返る（2017 年３月インタビュー、2018 年７月手紙）。このように、尺炭小では、

本田氏を中心に、戦後すぐからグループ学習[3]やリーダーづくりを取り入れ、児童たちの主体的学習を促していた。

こうした先進的かつ独創的な取り組みは、上述のように教え子たちの記憶に鮮明に残ると同時に、つぎの「数え歌」によって歌い継がれている。この歌は、木幡氏らの学年が尺炭小を卒業する際に、本田氏が作成・披露した歌である。

一つとや　一つの心で結び合い　結び合い／卒業するとも離るるな　離るるな
二つとや　富士の高嶺の気高さを　気高さを／白線帽子に求めよや　求めよや
三つとや　身につく学習怠るな　怠るな／日記を続けて記録せよ　記録せよ
四つとや　良き世は君らの世界から　世界から／子どもの広場を忘るるな　忘るるな
五つとや　いつもにこにこ元気よく　元気よく／健康第一努めよや　努めよや
六つとや　胸に手を当て考えよ　考えよ／真理の国はわれにあり　われにあり
七つとや　何が来ようと平気だぞ　平気だぞ／心に太陽口に歌　口に歌
八つとや　優しい心の中学生　中学生／小学生をば見ておくれ　見ておくれ
九つとや　心に刻んだ文化祭　文化祭／努力の結晶ここにあり　ここにあり
十とや　時計を見たらば思い出せ　思い出せ／可愛い姿の赤時計　赤時計

（2018 年 7 月、木幡一夫氏提供）

最後の「赤時計」とは、紅林晃校長が出張の際に、お土産として購入し学校に寄付した時計であり、以来、学級を「赤時計会」と名づけて勉学に励んだという。木幡氏をはじめ本田氏の教えを受けた児童たちは、この歌を聞いて泣きながら卒業していった。そして、半世紀以上経ってもなお、彼らはこの歌を諳んじ、恩師を偲んでいるのである（2018 年 7 月木幡氏手紙より）。

３－１－３．社会科研究指定校としての実践

その後、本田氏の実践を継承する形で、尺炭小は、1951（昭和 26）～54（同 29）年にかけて、社会科研究指定校となった。その目的は、「尺別という炭礦地域の具体的な課題解決の実践力をもつ、個性ゆたかな人間の育成」であり（釧路國教育研究所 1954: 6）、なおかつ以下のような認識のもと研究を進めた。

> 子供の姿の中に…地域社会の中に、更に日本の姿の中に問題を求め、その盲点を鋭く追求していくための、社会機構の系統的基礎学習であり、解決学習であって、子どもの成長とその段階に即して、鋭く高くもりあげられた知的活動学習である〈単なる理解学習にあらず〉（釧路國教育研究所 1954: 7）

加えて、日常生活課程が上記の基礎的学習のもとに求められる実践の場であり、両輪であると

[3] 青井（1958）によれば、「グループ学習」は、敗戦後アメリカ教育学の影響を受けていち早く導入された「個人主義的集団教育」である。これに対し、後述する集団主義教育は、1950 年代後半以降、ソ連や中国の影響を受けて導入され、「個人の自主性と自発性を育てあげると同時に集団の統一と規律を獲得する教育」（青井 1958: 135）であった。

いう認識のもと、1951～53 年度にかけて、以下のような実践をおこなった（釧路國教育研究所 1954: 7-9）。

- 1951 年度
  - ・社会科中心のカリキュラム
- 1952 年度：社会科教育の確立をめざして
  （現実生活に立脚した社会科学習はどうあるべきか）
  - ・家庭の生活と社会科（１年）
    「家庭に於ける子供の現実の生る姿を求めなければならない」という認識のもと、家庭訪問を重視
  - ・社会科学習法を研究することによって認識の度を深める（２～４年）
    能率的な学習指導法の研究、劇化活動（３年）
    グループ学習と統計図表による活動（４年）
  - ・社會現象を通して子供と教師が日記や作文でつながる（５～６年）
    「子供たちが今何を考え、何を求めているか、之は毎日の日記に求められる。又単元の進み、学習の結果を教師がとらえるためにも効果があると思われる」
  - ・管内３校との共同研究（中庶路小、阿寒小、川湯小、本校：「社会科学習の理解と生活現実の対決」）
- 1953 年度：社会科教育前進のために（個人別の課題）
  - ・生活態度の形成を主とする社会科（１年、夕下）
  - ・社会科学習の目標とマッチした学習展開（１年、畠山）
  - ・社会科教材を如何に生活化するか（２年、藤岡）
  - ・グループ学習の効果的指導（３年、熊倉）
  - ・問題解決学習の有効的な展開（４年、太田）
  - ・自己意識を高め、協力的態度を育成する社会科（５年、住川）
  - ・問題意識を高める単元学習（６年、黒木・岩坂）

そして、1954（昭和 29）年度にむけて、新たな課題（社会科の見直し、教育計画に対する再検討、現場学習にもっと情熱をかきたてる、子供に対する人間的なつながりを深める）を設定し、以下のとおり、より実践的な研究を進めた。

- 社会科学習の視点の据え方――教科書を中心とした一考察（山畠正司）
  概要：教科書分析を行い、教科書の解釈に終始している社会科学習を問題視し、積極的な教科書を駆使する位置への転換（「教科書の内容を自由に批判し、地域の実態と結んで検討出来る立場に立たしめる」）を企図。結論として「各地域に即した教科書」を強調。

- 望ましい生活態度を形成する社会科（１年担当、夕下幹子）
  概要：低学年から望ましい生活態度の習慣化が必要であり、その役割は社会科に課され

ているという認識のもと、「良い子の一日表」を用いた家庭との結びつき教育を実践（１ヶ月分を家庭に配布。毎晩子どもの生活態度を○△×で評価。毎月行われる「社会学級」で表彰・意見交換)。「子供の躾に就いても無関心な家庭が多く」、「家庭に足を運び親も一緒になって正しい生活経験をさせてほしいと言うことをお願いしようと」思うなど、「望ましい生活態度を形成する社会科は、地域への、中へ飛び込んで行く極めて難しい仕事の中に、数多くの解決路を持っている」という結論。

- 子供の問題意識について――新聞学習を通して（６年担当、黒木重雄）

  概要：作文を通して学級、学校、社会に対する問題意識を高めようと、新聞学習を採用。児童たちは、身近に起きた「小さな」出来事を学級・学校全体の問題として取り上げ、解決・改善を呼びかける。地域における問題では、「家の人にも話そう」という動きがあった。「知識に偏せず子どもたちの眼の広がりにも役立」つ効果があった。

上記３例からわかるように、教員たちは、地域や家族との結びつきをもとに、児童の問題意識を高め、生活態度を改善させる社会科教育を志向していた。学校全体として課題解決に取り組むため、研究活動内容の発表・共有を目的とした校内研究機関紙「尺炭教育」の発行、毎週金曜日の研究授業、そのほか討論会や研修発表会が設けられた。「尺炭教育」の発行は、教科教育法のみならず、教育全般の課題についても議論される場であった。とりわけ、社会科教育に関する情勢の変化について、尺炭小の教員たちは「尺炭教育」を通じた研究発表によって方向性を見出そうとしていた。

> 講和、独立を機としての、自立教育、学力低下、道徳教育、平和教育問題から、社会科教育批判更に社会科改善への問題と我々にとって、幾多の重要且直接的な諸問題が、ふりかかって来たが、その度に「尺炭教育」を通じて研究発表し、之を研修の素材として討論し合ったり又は職員研修として平和教育問題について研修しあったりして、我々の歩みとその方向の是非については一応の結論を見なしながら、進めて来たつもりである。（釧路國教育研究所 1954: 7-8）

そして、教員自身が「生活教育の担当者としてふさわしくあるべく」、「『尺炭教育』という機関紙を通じての研修で、肉付け」し、「視野を広め目をこやそうとし」た（釧路國教育研究所 1954: 8)。このように、「尺炭教育」という校内機関紙は、教育研究活動の充実と教員同士の研鑽に重要な役割を担っていた。

加えて、尺炭小の社会科教育研究内容は、音別町教育研究所（1952 年設立）の教育研究発表大会、さらには、釧路管内教育研究発表大会等を通じて、釧路管内に共有された。そして、1954（昭和 29）年には、『社会科指導計画の手引』（釧路社会科教育研究会 1954）を尺炭小が中心的にまとめるなど、尺炭小は、釧路管内における社会科教育研究の主導的位置にあった。

３－１－４．PTA 活動――父母の学びの場としての尺炭小：社会学級、一日入学

他方、戦前にみられた地域や家族との結びつきは、戦後も PTA 活動を通してさらに強化されていく。戦前から組織されていた「保護者会」が、1947（昭和 22）年に PTA（「父母と先生の会」）に組織替えした（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 13）。当時の活動目標は、「子ども等の幸福のためにわたくしたちは、よい父母、よい教師となることにつとめる」という内容であったが、「PR の不足もあって当初は保護者会的感覚からの脱皮はなかなか容易でなかった」（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 13）。1951（昭和 26）～63（同 38）年度に PTA 会長を務めた熊谷五郎氏（尺炭郵便局長）は、PTA 活動促進のために、まず役員のなかで「熱気のある会合」を重ねたと振り返る。

> 役員自身が会の目的を理解認識し、率先範を示さなければならないとして、役員会も頻繁に行われた後には月２回定例日に開催のこととなったが、月２回の役員会出席はなかなか容易ではなかった。１日の疲れもものかは、夕食もそこそこに、又、時には夕食後で定刻５時 30 分集合、半月の反省と次の実践計画の討議、そして研修と厳寒時或は吹雪もいとわず時のたつのも忘れて熱気のある会合が続けられたが、今でもなつかしく、お母さん、役員の方々はよくぞ堪えられたものと思う。（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14）

そして、活動の対象は、役員から会員全体へと広がり、「なかでも社会学級の誕生は PTA 活動促進のため大きな役割」を果した（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14）。これは、1950 年代前半に釧路管内の大手炭鉱山元を中心に見られた「新生活運動」（生活刷新運動）と符合する動きであり、尺別においても主婦会を中心に行われた（北海道新聞 1954.5.3 朝刊）。その際、尺炭小が学びの場となっていた。

> 新生活は新知識からと社会学級は管内でも一番盛んだ。毎月 20 日に小学校で開かれるが常に 200 名近くも押寄せている。学校側との懇談、時事問題の解説、生活改善方法の講演、衛生知識の講義あるいは当用漢字の使い方、正しい日本語の話し方などまで、釧路市から専門家を招いて熱心に３時間勉強している。今年は６地区に花壇を設けて子供らの教材に使用させると共に“わが谷は緑なりき”をうたおうと学校、会社、主婦会が熱を入れている。（北海道新聞 1954.5.3 朝刊）

このように、主婦（母親）たちは、生活改善に不可欠な「新知識」を学ぼうとし、学校・教員は、母親たちの教育水準を高め、学校教育への理解を高めようとした。彼らの利害が一致し、社会学級が盛んになった。ただし、父親の参加は少なかったため、PTA は、「一日入学（のちの日曜入学）」を実施した。前述の熊谷会長は以下のように振り返る。

> 炭山の公休日を選び、父母の一日入学を呼びかけたが、多い時は 400 名近い父母が入学し、入学式を終えてそれぞれ高、中、低学年にわかれて授業を行い、パンと牛乳の給食を共にし、卒業式の蛍の光の合唱は今でも楽しい想い出である。（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14）

一方、学校・教員側もこうした学びの場や PTA 活動を活用して、父母の教育水準と教育理解を高めようとした。1955（昭和 30）年に校長として赴任した箱崎金三郎氏（1954-60 年勤務）は、「釧路連 P 事務局長として地区 PTA 活動の推進力となっているこの道のベテラン」であった（北海道 PTA 連合会編 1957: 18）。箱崎氏は、紅林鐵雄氏の教え子であり、のちに尺別尋常小学校で鐵雄氏とともに教鞭をとった（紅林鐵雄 1967: 77）。鐵雄氏の教育理念を会得していた箱崎氏は、1957（昭和 32）年の第４回 PTA 研究大会「会員の教養を高めるためにどのような事をしたらよいのか」部会において提言者を務め、父母と教師の結びつきの達成に関する具体的施策を以下のように提言した。

（１）のぞましい父母の人間像を考え、それに達するための活動
- 月１回の社会学級・父親のための PTA１日入学（公休日に繰り替え授業で学校を開放する）、母親の希望者によるサークル活動（作文・音楽など）

（２）運営上の問題点と対策
- 集めることの工夫（皆勤・精勤賞、授業参観、学級懇談のプロ、時期の検討）
- 学習内容の検討（レクリエーションを入れる、講演内容の具体性と講師の選定、自校職員にできるだけ発表させる）
- 自主的活動へのもりあげに配慮（サークル活動の活発化、生活指導の実践発表・生活改善運動の促進、研究テーマの自主的決定）

この提言に対し、部会では、母親を中心に PTA 活動が行われているにもかかわらず、父親の発言権が強い点、ならびに父親の無理解が母親の出席をさまたげている点などが指摘された。箱崎氏は、それらの理由として、「第一に母親として勉強する時間がまだ少ないこと。それは、母親たちが封建的な習慣から立ちなおる機会にまだめぐまれないからである」と回答している（北海道 PTA 連合会編 1957: 19）。こうした認識のもと、箱崎校長は、父母の教養を高め、主体性を促すために、社会学級やサークル活動を尺炭小で実践した。そして、「自校職員に」積極的に発表させることで、父母との結びつきを強めようとした。

３－１－５．地区懇談会・子ども会、後援活動

他方、尺炭小は、全会員を対象とした活動をさらに促進するため、全山を５地域に分けて地区懇談会を実施した。「学校からの連絡、意見交換、行事打合わせ等について活発に行われ」、前述の熊谷会長は「有意義であったと記憶している」（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14）。さらに、校外活動として子供会の育成に力を入れ、「子供会行事の協力、子供の広場づくり、花だんづくり、親子ピクニック等々盛沢山な行事が展開された」（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14）。特に、子ども会は、尺炭小教師陣がおこなっていた集団教育の一環ともいえ、その内容はつぎの愛唱歌、「子ども会の歌」に表れている。

１．炭砿にひびく　サイレンは／炭砿の子どもの　心だよ／おじさんたちに負けないで／ひらくぼくらの学校は／サンと輝く太陽に／にっこり応えて育つのだ
２．みんなのみんなの学校は／にこにこひらく誕生会／はきはきめぐるお話会／若葉の下の

相談も／長屋の壁の作品も／炭砿の子どもの　心だよ

3．けんかしないでたすけ合い／にこにこピンピン集まって／広場でつくる花の輪で／楽しい住みよい炭砿と／明るい日本をつくるのが／炭砿の子どもの　心だよ

（2018 年 7 月、木幡一夫氏提供）

加えて、PTA の特筆すべき活動として、後援活動が挙げられる。とりわけ、1948（昭和 23）年に釧路管内各校にさきがけて実施された学校給食は、教員と父母の連携ならびに会社の協力によって達成された。

> せめて冬期間だけでも温いものと同じように与えたいとする学校側の提案に対してＰ側は賛成し給食設備を計画したが、公費の支出は全く不可能であり、これが資金調達を全父兄の石炭拾い（ズリ山からの堀り出し炭）作業によったことである。公休日に全父兄教師が各地区毎に出勤し、選び出した石炭を会社に買上げて貰いその資金で給食室の設備或は備品類の調達を行った。炎天下乳のみ子を背負い、男も女も全身汗含みれとなって夢中で石炭拾いしたその苦労も、初めて給食を手にして喜ぶ子どもたちの笑顔ですっかり忘れ去ってしまったことを思い出す。（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14、括弧内は原文ママ）

このほか、校庭の植樹や児童図書館の設立、学校放送機材、テレビ、映写機、グランドピアノ等の購入を行い、「何れも大半が父兄の労力奉仕の収益金、或いは好意による寄附金によったこと」であった。これらは、子どもたちのためである一方、「先生によりよい教育をして頂こうとする」ための後援活動でもあった（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14）。

こうした尺炭小の活発な PTA 活動が展開できた背景について、熊谷会長は、「会社幹部の深い御理解による援助」、「諸団体の協力」に加えて、「歴代校長が中心となって全教師が新教育をとおして、PTA 活動に情熱を燃してくれた賜であり父兄はこの教師の熱意に動かされた」としている（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 14-5）。

３－２．尺炭中の教育――尺炭小教育の連続性

一方、戦後の新制により新たに設立された中学校（尺炭中）では、どのような教育が展開されたのだろうか。創立当初は、中学校教育の定着が大きな課題であった。

３－２－１．「芋こじ式」教育――草創期

1947（昭和 22）年、新学制（６・３制）実施により、尺別炭砿国民学校高等科は廃止され、５月に尺別炭砿中学校が、尺炭小に併設する形で開校した。まもなく卒業するはずだった高等科２年生たちは、さらに１年間学校に通わなければならなかった。尺炭中第１期生が、「先生方が大変苦労をされ、親に、１年残ってもらうため何回も各家庭を訪問されて留学に努めたと思います」と回想しているように（記念誌編集委員会編 2000: 116）、新制度への移行にあたって、教員たちは困難に直面した。

そもそも第一の課題は、教員の確保である。尺炭中の初代教頭を務めた沼崎吉麒氏は、もともと尺炭小の教員であったが、尺炭中開校にともない、異動となった。尺炭中草創期の雑多な状況

について、沼崎氏は、以下のように振り返っている。

> 新制尺別炭礦中学校発足、紅林校長（引用者注：晃氏）宅深夜、千葉良雄、本田清、私の３人の中からひとり中学校教頭に転出せよといわれ、遂に私が説得され中学校へまわることになりました。／（中略）草創期は想い起しますと、君たち（引用者注：第４期生ほか尺炭中生徒たち）は岐線から尺別原野から、緑町・旭町・大曲から泥をつけた若芋のようにどっと入学してきました。待ち構える若々しい個性的な教師たちの情熱と若い生命との芋こじ式なドロンコ教育実践の中で推進されていったと確信しています。私も学級担任兼務で部活動か高校進学指導に情熱を注ぎました。（尺炭中４期生同窓会 1995）

このころ、尺別炭砿の戦後復興と拡大にともない、多くの炭鉱子弟が尺炭中に入学し、さらに、商店や尺別原野、岐線の子弟らも入学した。そうした雑多な環境下で、沼崎氏や「若々しい個性的な教師たち」が新制中学確立のため尽力した。

また、沼崎氏は、1948（昭和 23）年に結婚し、炭住に入居してから、学校外でも「芋こじ式」の生活を送ったという。

> さあ大変、教え子が（炭住に）沢山います。――今日は先生を入浴させる日と強制連行される。家中ゲーム遊び、家内も何かおやつを作って食べさせる。肌のふれ合う中、不屈の闘志と団結・深い友情など尺炭中教育の芋こじの中で培われたと思っています。（尺炭中４期生同窓会 1995）

沼崎氏のいう「芋こじ式」教育は、学校生活だけでなく、炭住（長屋）生活での教員と子どものふれ合いも含まれており、そのなかで、生徒のみならず教員自身も「闘志」「団結」「友情」を培ったとしている。

３－２－２．教育研究

また、尺炭小でもみられた精力的な教育研究は、尺炭中においてもみられた。1950（昭和 25）年から尺炭中で教鞭をとった吉田範正氏（1950-59 年勤務、尺炭出身）は、「尺炭教育」という呼称を使って、精力的な教育研究が行われていたと回顧している。

> 尺炭教育を旗印に、当時の一戸校長を中心に頑張った仲間達、職員室の中はやる気でいっぱいだった。日頃の教室実践や研究の成果を、管内や道に反映してがんばったあの頃、研修やガリ切りで夜８時、９時になるのはあたり前であったしきびしい現在の教育現場では想像も出来ない事がスムーズに行われたよき時代でもあった。（尺別炭砿中学校編 1970: 5-6）

後述するように、教員たちは、教育研究の内容を音別町や釧路管内教育研究所での研究発表大会で発表し、そのなかから、しばしば、全道大会に選出されることもあった（音別町教育研究所 1961）。1955（昭和 30）年から尺炭中に勤務した村雲忠夫氏（1955-69 年勤務）は、「『ウチは頑張っていて、よかった』と、そのぐらい自負していました」と振り返る。そして、村雲氏は、そう

した尺炭中教員の精力的な研究活動の要因として、地理的条件を挙げている。

> あそこ（引用者注：尺炭中）は閉じこもった一か所だけの学校だったので、釧路市や近隣の学校との交流もなかなか難しく、いろいろなデータもなかったので、「果してこれでいいのか」と日常的に比較できませんでした。ほかと交流できれば、もっと余裕を持って、「よそではこういうことで悩んで、苦労して、こういう失敗もいっぱいあるのか」ということがわかって楽でしたけど、狭いなか、なんとか自分たちでやらねばならないということで、「先生方もがんばった」と思います。手さぐりの部分もかなりありました。（中略）職員会議で、カリキュラムのことだけでなく授業方法についても校内の授業研（ジュギョウケン）でお互い「大事なことだから」とアドバイスし合いました。（2017 年３月村雲氏インタビュー）

このように、都市部から離れた山間の学校という地理的条件が、教員たちの学校教育に対する不安を生み出す反面、「自分たちでいろいろやらねば」と奮起させた。隣接する尺炭小の教員たちとは、「親睦のスポーツ交流はあった」が、「指導の中身や、課題は、小学校と中学校では大いに違いますから、どうしても、授業の深いところでは接点が少なかった」という（2017 年３月村雲氏インタビュー）。

３－２－３．PTA 活動

他方、PTA 活動も尺炭小同様に力を入れていた。開校年度から「父兄教師の会」、翌年には「母姉会」が設立され（尺別炭砿中学校 1957）、学校施設・環境の整備に貢献した。1951（昭和 26）年度から設置された簡易の図書閲覧室（音楽室兼用）は、それまで PTA や村から毎年支出されてきた図書費と、「生徒の読書欲」に促された「全父兄の力強い理解と援助、村当局の理解」によって開室・運営された（釧路國教育研究所 1954: 80）。

また、1954（昭和 29）年には父兄、尺別炭砿砿業所、健康保険組合の支援を得て、ズリ山を崩して埋め立てた屋外運動場が完成した。当時、この拡張作業にあたった吉田範正氏は、以下のように振り返る。

> 中体連での活躍も盛んになるにつれ、狭いグランドではどうにもならないと生徒と教師の手で始まった放課後のグランド拡張工事それが PTA、街全体へと輪を広げて、あのりっぱなグランドが出来上がった。放課後汗を流してのトロッコ押しがつい昨日の事のように浮かび上がってくる。（尺別炭砿中学校編 1970: 5）

このほか、尺別炭砿鉱業所は、教員住宅（寮）の暖房（石炭）や電気、水道等を補助した。前述の村雲氏は、「会社も学校の教員に対する期待は大変大きく、赴任した当時の待遇はよかった」と振り返る（2017 年３月村雲氏インタビュー）。

そして、開校 10 周年の 1957（昭和 32）年には、これらの会が中心となって協賛会を組織し、記念式典を開催した。同会の会長であり 1957 年度「父兄教師の会」会長の大越二郎氏は、10 周年に際し、さらなる父母－教員間の連携と継続を訴えている。

父母と教師も卒業生もが相協力してこの協賛会が発足しましたが、学校教育は家庭教育・成人教育と切りはなすことの出来ないことでありますから、形の上では行事終了後解散こそすれ、この美しい相互の協力体制を精神的に崩すことなく、末永く将来に向って持続したいものと切に考えております。（中略）子どもたちの成長につれ、それに適応した家庭教育・社会教育は、この学校の卒業生である兄姉にあたる人達は勿論、地域社会人全般に課せられた責務であると存じます。何卒、この機会に、より一層在校生を中心とした各種集会、或いは諸行事を通じまして相互教育・自己教育が実践されますよう心から希求してやまない次第であります。（尺別炭砿中学校 1957: 2）

このように、尺炭中は、早期に PTA を組織し、後援活動をはじめ、開校 10 年足らずでその連携体制を確立した。これは、尺炭小で培った PTA の思想を中学校に移行・継承した結果といえる。

３－２－４．進路指導

一方、中学校ならではの課題として、進路指導が挙げられる。前述の沼崎氏の引用に、「高校進学指導に情熱を注ぎました」とあるように、尺炭中創立まもないころから進路指導に力を入れていたことがわかる。また、1957（昭和 32）年度の「経営の重点」には「進路適応の基礎的指導」と書かれており（尺別炭砿中学校 1957: 7）、進路指導が重視されていたことがわかる。

具体的にどのような進路指導がおこなわれていたのだろうか。1950 年代半ばに卒業した同窓生の回想からは、教員たちの意欲的な進学指導がみられる。1954（昭和 29）年に卒業し、釧路の進学校、湖陵高校に進学した生徒（第 7 期生）は、「先生方が本当に熱心で、日曜日に補習があった」と振り返っている。また、同年に釧路工業高校に進学した生徒は、高校進学に反対する母親に対し、「願書提出のころ、吉田範正先生に家庭訪問をしてもらい、おそらく母親を説き伏せてくれた」という（いずれも 2017 年同窓生へのインタビュー）。当時、尺別から釧路の高校への進学は交通面または金銭面で容易ではなく、主流の選択肢ではなかったが、教員たちは生徒の進学意欲や向学心を尊重し、高校進学を促進した。

一方、職業指導は、尺炭中に長く勤めた前述の市橋氏を中心に進められた。それまでの職業指導は、職安によって担われており、市橋氏は、「『これでいいのか』と思うことがずいぶんありました」と振り返る。そこで、市橋氏は、「学校長が安定所に届け出れば、そこの学校の教員が進路指導、職業指導できる」制度を活用し、自ら職業指導をおこなった。とりわけ、注意したのは女子生徒の職業指導だったという。

とくに、女生徒の就職口は苦労しました。一番大事なのは、誰と誰を一緒に就職させるかということでした。安定所に来る中学校の求人が全部学校に来て、そのなかから生徒にあった就職先を選び、誰と誰を一緒に就職させるかということを学校でできるようになりました。（2017 年 7 月市橋氏インタビュー）

このように市橋氏は、当時の職安では考慮しないような生徒の個性や人間関係を考慮し、職業指導をおこなった。こうした指導を、釧路管内の３校（厚岸町立真龍中学校、阿寒町立雄別中学校、白糠町立庶路中学校）で実施し、全道と全国の教育研究発表大会で報告した。市橋氏は、「（全

国大会の）分科会に行ったら、みんなに珍しがられました。『よくやったなぁ』って。ですから、進路指導については、ほかの人に文句言われないくらい仕事したと自負します」と振り返る（2017年７月市橋氏インタビュー）。

３－２－５．階層差別に関する教育・指導

また、市橋氏は、進路指導と同じく注力した分野として、階層差別[4]に関する教育・指導を挙げている。尺炭中の卒業生たちは、回顧的な調査のなかで、学校における階層差はなかったと回答しているが（嶋﨑ら 2017）、その背景には教員らの教育・指導があった。とりわけ、市橋氏は、小学４年生のときに経験した「区別」や「差別」をもとに、差別に関する教育・指導に力を入れたと述べる。

> 私が小学校４年生のころ、父親が尺別炭砿を辞めて、組（のちの市橋組）設立のため独立し、炭鉱の職員と鉱員、組夫の身分差を、身をもって感じました。組夫は、炭鉱では「社外」と呼ばれ、「お前は、社外だからダメだ」と仲間に入れてくれませんでした。「社外」という言葉は、社内の人が社外の者に対して軽く使われるので、区別とか差別とかでないのですが、使われた側からすると、完全に差別された言い方になります。それだけに、教員になったら職員の子どもたち、炭鉱の子どもたち、社外の子どもたち、この差別だけは学校で持ちたくないし、子どもたちも持ってほしくないと思いました。（中略）尺炭の教員たちは、職員の子と従業員の子の間で絶対に差別や区別がないよう、十分配慮をしましたが、そのなかで一番配慮したのは私だと思っています。教員でいる間は、これは自分の仕事だと思ってきました。（2017 年８月市橋氏インタビュー）

このように、市橋氏は、自身が子ども時代に受けた「区別」ないし「差別」を基点に、教員として差別意識を持ち込まず、なおかつ、子どもたちにも持たせない教育を展開した。こうした意識は、他の教員も同様に持ち、その後の尺炭中に継承される。

３－３．尺炭教育の発信と研鑽――町内教育研究所での尺炭小・中学校教員の活動

以上のような、尺炭小・中学校における教員主導の教育実践は、両校それぞれで展開される一方、町内外の研究発表会や集会等で情報共有された。特に、音別町教育研究所の諸活動は、両校の交流のみならず、町内の小中学校教員との交流を促し、音別町全体の教育に貢献した。以下では、同研究所の発足と教員たちの研究活動についてみていく。

---

[4] 一般的に、炭鉱の子どもたちは、父親の炭鉱での職位（階層）にもとづいて、「職員の子ども」、「鉱員の子ども」、「組夫の子ども」に分かれる。職員の子どもたちは、比較的、好条件の住居（職員住宅）に住み、親の学歴も高く、文化資本に恵まれる傾向にあった。一方、「鉱員の子ども」は、「ハーモニカ長屋」と呼ばれる炭住に住み、便所・水道・風呂などは共同であった。そして、「組夫の子ども」は、より劣悪な条件のもと生活していた。こうした家庭生活における階層差は、学力や生活態度等、学校生活に少なからず反映した（新藤 2015）。

３－３－１．研究所の発足

同研究所は、道東の拠点都市、釧路市における「釧・教・研の発足（釧路市教育研究所、1952年設立）に刺激を受け、管内各町村にさきがけて、現場教師の欲求が逐年高まり、（引用者注：昭和）26年度の意思統一期を経て」（音別町教育研究所 1961: 3)、1952（昭和27）年度に設立された[5]。初代所長には尺炭小の江尻義雄氏が着任し、尺炭小・中学校の主たる教員たちが同研究所の各部門を担当するなど（表３）、同研究所の設立・運営に貢献した。初年度から同研究所所員として活動していた黒木重雄氏（尺炭小）は、「学習資料集作り」や「村の教育目標作り」を尺炭中の教員らとともに取り組んだと振り返っている（音別町教育研究所 1961: 8)。以下、同研究所の活動内容とそのなかでの尺炭小・中学校教員たちの取り組みを具体的にみていく。

表３　音別町教育研究所歴代所長ならびに所員担当部門一覧

年度	所長	総務	報道	研修	調査	事業
1952 年	江尻義雄 （尺炭小）	糀本辰松(尺炭小) 金谷昭二(尺炭中) 佐藤清子(音中)	黒木重雄(尺炭小) 江馬良幸(尺炭小) 前田正雄(二俣小)	山畠正司(尺炭小) 宮井憲一(音小) 高沢慶次郎(霧小)	渡辺久次郎(尺炭中) 大黒八千代(音小)	吉田範正(尺炭中) 谷津洵(音中)
1953 年	江尻義雄 (尺炭小)	糀本辰松(尺炭小) 高沢慶次郎(霧小)	黒木重雄(尺炭小) 一戸勲(尺炭中)	金谷昭二(尺炭中) 中川登志雄(音中)	江馬良幸(尺炭小) 中野正敏(尺小)	宮井憲一(音小) 森川貞敏(二俣小)
1954 年	江尻義雄 （尺炭小）	糀本辰松(尺炭小) 中野正敏(尺小) 畠山徳蔵(役場)	黒木重雄(尺炭小) 森川貞敏(二俣小)	宮井憲一(音小) 小林賢治(直小)	一戸勲(尺炭中) 吉田範正(尺炭中)	中川登志雄(音中) 安住新三郎 （中音小）
1955 年	一戸勲 （尺炭中）	青田稔(尺炭中)	黒木重雄(尺炭小)	中野正敏(尺小) 安宅隆(尺炭中) 黒木重雄(尺炭小)	宮井憲一(音小) 谷津洵(音中) 住川十喜男(尺炭小) 畠山徳蔵(役場) 青田稔(尺炭中)	
1956 年	一戸勲 （尺炭中）	青田稔(尺炭中)	黒木重雄(尺炭小)	中野正敏(尺小) 黒木重雄(尺炭小) 青田稔(尺炭中) 安宅隆(尺炭中)	宮井憲一(音小) 谷津洵(音中) 住川十喜男(尺炭小) 畠山徳蔵(役場)	
1957 年	一戸勲 （尺炭中）	青田稔(尺炭中)	黒木重雄(尺炭小)	黒木重雄(尺炭小) 安宅隆(尺炭中) 佐藤要(音中)	宮井憲一(音小) 佐藤清一(第二中) 住川十喜男(尺炭小)	
1958 年	一戸勲 （尺炭中）	一戸勲(尺炭中) 渡部渉(直中)	山王丸喜一 （尺炭小）	大友孝一(尺炭小) 大黒八千代(音小) 小笠原修徳(尺炭中)	吉田寿恵男(音中) 池端清美(尺炭中)	
1959 年	箱崎金三郎 （尺炭中）	黒木重雄(尺炭小)	黒木重雄(尺炭小)	松下昇(音小) 鳴海二郎(二俣中) 青田稔(尺炭中)	吉田寿恵男(音中) 市橋大明(尺炭中) 熊倉万千百(尺炭小)	
1960 年	北沢清四郎 （音小）	神田貫宗(音小) 矢尾板実(音小) 中山優(教委)		佐藤要(音中) 中出憲一(尺小)	鳴海二郎(二俣中) 青田稔(尺炭中)	矢尾板実(音小) 船山専秀(尺炭小)

音別町教育研究所（1961: 6-7）より転載

[5] 当時、管内で教育研究所を設立していたのは釧路村だけだった（音別町教育研究所 1961: ３）

３－３－２．教育研究活動

同研究所の主たる活動は、教育研究発表会であり、尺炭小・中学校教員が意欲的に取り組んでいる。表４は、1954（昭和 29）年～60（同 35）年にかけての研究発表会等の流れである。「音別村教育研究発表大会」は、1954（昭和 29）年から開始され、各教員が研究発表を行い、研究討議によって「釧路管内教育研究発表大会」にて報告する教員が選出された。第１・２回大会（1954・55 年）では報告者は３名ずつと少なく、参加賞として発表者全員に 500 円が贈呈されていたが、第２回大会の反省として、「やるから出てくれという感じで、研究大会が形式化している」、「１年の研修のしめくくりというようにあるべきと思う」、「単複から出場がないことの対策」が挙げられた（音別町教育研究所 1961: 10）。そして、指導主事から「１人１研究又は１発表でほしい」、「ブロック別又はテーマ別に研究を進めてみてはどうか」、「組織の上にうまくのせてほしい」、「サークル活動をいかしてほしい」という講評があった（音別町教育研究所 1961: 11）。

第３・４回大会（1956・57 年）の詳細なプログラムは不明であるが、第５回大会（1958 年）では、４つの分科会に分かれて研究発表が行われた。村内各学校長が各部会の助言者となり、「先生方が１人１研究を持ち寄り」「熱心に研究討議を行った」（音別町教育研究所 1961: 16）。両大会合わせた全 43 報告のうち、尺炭小・中学校教員による報告が過半数を占め（尺炭小：19、尺炭中：９）、加えて、両校の教員１名ずつが釧路管内教育研究発表大会に選出された。両校の教員たちの熱心な研究会活動もさることながら、この第５回大会は「ともかく新しい試みとしての１人１研究による発表会が多くの成果を残すことのできたのは本村の教育研究に一転期（ママ）をもたらした」という点で意義があった（音別町教育研究所 1961: 16）。

そのほかの研究集会においても、尺炭小・中学校がイニシアチブを発揮する。1957（昭和 32）年に開催された「社会科研究集会」では、前述のとおり社会科教育研究指定校になっていた尺炭小ならびに尺炭中の議案によって、「どのようにして小中学校を一貫した社会科特に歴史的学習の教育課程をくむか」が討議された。また、1959（昭和 34）年に行われた「音別町国語・社会・算数教育研究会」では、かつて、尺炭小の中心的存在であった本田清氏（1959 年当時、学大旭川分校付属小）を招き、子どもの日記を通した指導に関する講演をおこなった。

その後の研究発表大会においても、多くの尺炭小・中学校教員が研究発表し、釧路管内教育研究発表大会に選出された。なかには、市橋氏のように全道大会や全国大会にまで選出されるケースがみられ、彼らの研究活動に対する熱心さと水準の高さがうかがえる。

表４　音別町教育研究発表大会等プログラム（1954-60 年）

第1回音別村教育研究発表大会（1954 年2月 27 日、於：音別小学校）			
研究発表タイトル	報告者	所属	釧路選出者
「器楽指導としてのハーモニカ」	小玉利喜夫	二俣中	
「本校における遅進児指導の実態」	大友孝一	尺炭小	
「本校における低学年カリキュラムの現況」	山内章	尺別小	○
第2回音別村教育研究発表大会（1955 年2月 19 日、於：音別小学校）			
「ローマ字と英語との関連についての一考察」	岩本茂治	尺炭中	○
「マット自作作用について」	大野三夫	音別小	
「学級経営前進のためにその研修体制と営みの一端」	住川十喜男	尺炭小	
音別村内多級校と学大函館付属共同研究会（1955 年3月 10 日、於：音別小学校）			
研究主題：基礎学力の育て方（国語、数学の場合：視聴覚的方法、ドリル学習）			
第3回音別村教育研究発表大会（1956 年2月 11 日、於：音別中学校）			
（発表タイトル・報告者不明）			
社会科教育研究会（1956 年9月18日、於：尺別炭砿小学校）			
研究主題：社会科学習の効率化をはかる指導法			
第4回音別村教育研究発表大会（1957 年2月9日、於：音別中学校）			
（発表タイトル・報告者不明）			
社会科研究集会（1957 年 10 月 11-12 日、於：尺別炭砿小学校）			
研究主題：社会科学習において歴史的学習をどのように進めるか（学習内容の体系化（小中の一貫性をねらう）、学習指導の問題点）			
第1回釧路管内小中学校造形教育研究大会（1957 年 10 月 27-28 日、於：尺別炭砿中学校）			
研究主題：地域に即する造形教育内容はいかにあるべきか（地域性を生かした教育課程の改善、地方色ある教材の研究）			
第5回音別村教育研究発表大会（1958 年2月7日、於：音別小学校）			
第1部会　助言者：近藤校長（音別中）、恐神校長（尺別小）、司会者：工藤氏（音別小）			
「一年生の係の仕事をとおして子供の自主性・責任感を高めた」	千葉恵子	尺炭小	
「お話しをもとにして読書指導・生活指導の発展をはかった」	宮田三可	尺炭小	
「スモールプレーのクラブ活動から発展意欲をもりあげてきた」	渡部恵子	尺炭小	
「道徳教育は学校の実情に即して重点的に徳目をあげて徹底すべきである」	安宅隆	尺炭中	○
「道徳教育についての学校と家庭のくいちがいをなおしていかねばならぬ」	工藤与作	音別小	
「新しい道徳教育の時間特設についての問題点」	葭田野実	音別小	
「小中一体の子供会を組織し校外生活指導に力を入れた」	今野松雄 池田道夫	音別小	
「家庭生活環境調査をもとにして非行生の指導に力を入れた」	金沢利文	音別中	
第2部会　助言者：安住校長（中音小）、佐藤校長（音二小）、一戸校長（尺炭中）、司会者：吉田氏（尺炭中）			
「日記による作文指導と生活教育の一断片」	藤岡政恵	尺炭小	
「作文教育と道徳教育」	大友孝一	尺炭小	○
「作文指導による学級経営」	豊島豊	尺炭中	
「子どもを知るための日記指導」	沼沢馨	尺炭小	
「作文教育の限界と集団教育」	岩坂英雄	中音小	
「低学年の学習指導とお話し」	宮田三可	尺炭小	
「一年生の絵日記指導」	菅原純恵	尺炭小	
「文学教育についてのノート」	市橋大明	尺炭中	
「ノートの使い方の指導について」	大黒八千代	音別小	
「作文教育について」	田村茂	二俣中	
「二年生社会科（歴史）を学習して」	栗田則彦	音別中	
第3部会　助言者：北沢校長（音別小）、辰井校長（二俣小）、高沢校長（霧里小）、司会者：黒木氏（尺炭小）			
「音楽教具説明階名視唱練習板設計図」	植松芳夫	音別中	
「中学男子の変声期の指導」	村雲忠夫	尺炭中	

「音楽初歩指導の在り方」	住川十喜男	尺炭小	
「図案指導のための教材研究」	山内章	尺炭小	
「色彩指導」	木幡一夫	尺炭小	
「体育のきらいな児童の調査」	武田実	尺炭小	
「興味調査から眺めた体育の欠陥」	栗田守	尺炭小	
「冬季体育指導計画の一考察」	大野三夫	音別小	
「カリキュラム作成のための一考察」	佐藤靖昌	音別中	
「私の学級から」	船山専修	尺炭小	
「私はこんなドリル学習をしている」	熊野清	尺炭小	
「家庭学習を高める方途」	熊倉万千百	尺炭小	
第4部会　助言者：藤原校長（上音小）、渡部校長（直別小）、司会者：佐藤氏（音別中）			
「算数指導の教具」	熊野春子	尺炭小	
「女子職業の家庭科学習について」	本松暁子	音別中	
「家庭科単元の基礎技術の組合せについて」	平沢啓子	尺炭中	
「学校における簿記指導上の困難点」	足立秀人	尺炭中	
「中学数学の教材配列」	青田稔	尺炭中	
「珠算指導の実態と問題点」	山王丸喜一	尺炭小	
「理科における思考力の養成」	加藤　昭雄	尺炭小	
「視聴覚教育における教材教具を高めるために」	松坂忠士 山本誠	音別小	
「英語学習の諸問題」	岩本茂治	尺炭中	
「進路指導とその問題点」	小笠原修徳	尺炭中	
音別村多級校教育研究会（1958 年 10 月 20 日、於：音別小学校）			
研究主題：国語科における読解力を高める指導はどうあるべきか（読書指導、文字語彙語法はどうあるべきか）			
音別町国語・社会・算数教育研究会（1959 年6月6日、於：尺別炭砿小学校）			
総合研に対する推進の研究集会（1959 年7月5日、於：音別中学校）			
音別町教育研究集会（1959 年9月 26 日、於：音別中学校）			
「小中を通した図形学習における誤答の傾向」	木幡一夫	尺炭小	○
「系統性と社会認識の関係について」	熊倉万千百	尺炭小	○
「僻地校における英語教育の問題点」	岩本茂治	尺炭中	
「音楽指導の隘路とその打開策」	小原利夫 布子由美	二俣小 音別小	
「地域における言語生活の実態とその対策」	石森昇	尺炭小	○
「児童の発達段階に即した認識の過程」	安田優	尺炭小	
「国語・算数・間接指導の資料の整え方」	不動俊次	直別小	
「理科気象教材教科書研究より」	理科研究部	直別小	
「PTA 活動をめぐって父母との連携をどう深めたか」	大友孝一	尺炭小	○
「教科外活動の中での生活指導」	山王丸喜一	尺炭小	
「家庭との結びつきを重視した園の経営」	阿部允子	尺炭幼	
「進路指導の問題点」	市橋大明	尺炭中	
「ホーム・ルーム」	池端清美	尺炭中	
「集団形成への視点」	若狭章三	音別小	
音別町教育研究協議会（1960 年6月4日、於：音別中学校）			
白糠郡内多級研究会（1960 年9月 16 日、於：音別小学校・音別中学校）			
音別町教育研究集会（1960 年9月 25 日、於：音別中学校）			
「中学校における創作指導をどう進めるか」	村雲忠夫	尺炭中	○
「科学技術を育てる小学校の理科指導」	理科研究部	音別小	○
「図形校習における児童の実態と指導上の問題点」	坂野寅雄	尺炭小	○
「教育の系統」	教科研究部	尺炭中	○
「就職あっせんにおける問題点をひろう」	進路指導部	尺炭中	○

「本校における生活指導の実態」	渡辺五郎	尺炭小	○
「仲間作りの実践と進むべき方向」	白鳥敏勝	音別小	○
第3次総合研並びに第 10 次全道教研還流集会（1960 年 12 月 10 日、於：音別中学校）			

音別町教育研究所（1961）より作成

３－３－３．調査研究、資料集等発行、児童生徒中心の活動促進

他方、同研究所では、教育研究発表会のほかに「調査部」を中心とした遺跡調査と、その結果に基づく郷土資料集の作成・発行をおこなった。遺跡調査では、町内のチャシや尺別番屋などに関する文献・実地調査を実施し、現地に標識を建立した。そして、1950 年代に社会科の副読本をはじめとする４冊の郷土資料集が編纂された（表５）。尺炭小の黒木重雄氏によれば、学習資料集の作成は、尺炭中の渡辺久次郎氏が中心となって行われたと振り返っている。さらに、黒木氏の回想では、「村の教育目標作り」を糀本辰松氏（尺炭小）とともにおこなったとしており（音別町教育研究所 1961：8）、両校の教員が音別町（村）教育のために尽力していたようすがうかがえる。

さらに、児童生徒の文化的・健康的活動を促進するべく、さまざまな事業がおこなわれた。たとえば、文集「若草」（1954 年度～）は、「児童・生徒の生きた作品を通じ、お互いの生活を理解・認識し合い、併せて作文教育向上の一助になすことをねらい」に発行され（音別町教育研究所 1961：33）、児童生徒の作文、詩、短歌、俳句が掲載された。編集は、尺炭小・中と音別小・中が隔年で担当し、小学校版は年に２回、中学校版は年に１回発行された。そのほか、児童生徒間の交流と健康促進のために、町内オリンピック大会（1945 年度～、７月実施）、交歓学芸会（1954 年度～）、児童・生徒意見発表会（1956 年度～、年１回）、町内スケート大会（1956 年度～、２月実施）などが実施された。

以上のように、音別町教育研究所の諸活動は、町内教員らの交流と研鑽ならびに児童生徒の文化的活動と健康促進に貢献した。同研究所の設立、運営にあたっては、尺炭小・中学校教員が重要な位置を占め、音別町全体の教育水準の向上に寄与したといえる。さらに、彼らは、釧路教育研究所や民間教育団体（釧民教）の所長や所員を務めるなど、管内においても主導的立場にあった。紅林晃氏をはじめ両校の校長の多くは、釧路教育研究所所長や組合支部長などを務め、一般教員もまた副所長や所員などを務めた（釧路教育研究所編 1999）[6]。加えて、上述のとおり、各教員は、管内教育研究会への参加と報告を通して教育手法を磨いていった。彼らは、町内外の教育研究活動を通して、尺炭外の動向を抑えつつ、「尺炭教育」をさらに発展させていったのである。

表５　音別町教育研究所発行の資料集（1960 年まで）

資料名	発行年	発行責任者	内容
『社会科学習資料集　追録』	1953 年	江尻義雄	編集責任者：渡辺久次郎ほか 12 名
『音別村史　追録』	1954 年	江尻義雄	村の沿革史、学習資料集に類似
『音別村のあゆみ』	1955 年	江尻義雄	社会科の副読本、叙述は小学4年程度に書かれたもの
『郷土研究室』	1957 年	一戸勲	音別入植者たちの聞き書き、アイヌの生活等

音別町教育研究所（1961：30-1）より作成

[6] 次節でみる 1960 年代前半の尺炭小では、当時の高沢校長が釧路教育研究所所長であり、小場照秋氏が同研究所所員であったため、「『釧研の機構と活動範囲』のプリントにより、学習会をもてたことは何よりの収穫」（尺別炭砿小学校 1966：18）とある。

３－４．音別高校――地元の要望による定時制高校

以上のように、戦後から 1950 年代にかけて、尺炭小・中学校では精力的な教育実践が行われ、尺炭教育が確立していった。他方、この時代の尺別には、尺別炭砿の子弟たちにとって重要な教育機関がもう一つあった。それは、釧路湖陵高校分校、のちの音別高校である。同校はどのような経緯で尺別に設立され、どのような役割を果たしたのだろうか。

３－４－１．釧路湖陵高校分校（音別高校）の設立

釧路湖陵高校分校（定時制）は、1951（昭和 26）年４月、尺炭中に併設される形で開校した。分校とはいえ、「尺別炭砿というひとつの炭砿だけを基盤とした小さなマチにも高等学校が出来るというのは」「炭砿の人々にとっては青天の霹靂」だった（北海道音別高等学校同窓会 1988: 12）。同校が開校された経緯について、尺別砿業所庶務課長ならびに音別村教育委員長であった大野繁由氏は、生徒会誌に以下のように寄稿している。

> この地域に働く人々で向学心に燃えている者が可成り多数いたことを前々から聞いておりました。（中略）皆さん方の熱烈な要望が反映しまして村関係者の理解によって当音別高等学校の前身である釧路湖陵高等学校音別分校が昭和 26 年４月に設置されることになりました。（北海道音別高等学校生徒会文化部編［1955]1988: 14）

このように、同校は、新規中卒者だけでなく、義務教育修了後、炭鉱関連で働いていた人びとにとっても待望の高校であった。伝統校である釧路湖陵高校の分校が、音別村市街ではなく、尺別炭砿地域に開校される意義は大きかった。「全日制より１年間多く通学すれば湖陵高校の卒業生になれるという希望に燃えた 108 名」が第１期生として入学した（北海道音別高等学校生徒会文化部編［1955]1988: 12）。また、1950（昭和 25）年度ころから設立されていた尺別鉱業所実習所が廃止され、実習所に入所していた（入所する予定だった）青年たちにとって、分校は代替の教育機関となった。ある卒業生は、以下のように回想している。

> 昭和 26 年音別高校に第１期生として入学、当時私は尺別鉱業実習所の２年生でしたが（尺別砿業所で午前中は授業、午後から実習作業）、正規の高校の授業が受けられると胸をふくらませて入ったものです。（北海道音別高等学校同窓会 1988: 64）

こうして開校初年度は、「予想をはるかに超える入学者がどっと押しかけ、２学級編成でスタートした」（北海道音別高等学校同窓会 1988: 14）。しかし、彼らにとって日中の炭鉱関連での労働と夜間の授業は容易ではなかった[7]。ある１期生は、「昼間の重労働を終えた後、疲れを取るゆとりもなく慌ただしく学生服に着替えて」（北海道音別高等学校同窓会 1988: 56）、４時間の授業を受けたと回想している。また、炭鉱労働の特性でもある三交代制は、時間的に通学を困難にした。別の１期生は、「二番、三番方があると高校の勉学はできず、早稲田の通信教育・講義録をとった

[7] 第１期生には、当初、浦幌炭砿からの入学者も含まれていたが、次年度（1952 年）に池田高校の分校（定時制）が浦幌炭砿に開校したため、20 名近くの生徒が転校したという（北海道音別高等学校同窓会 1988: 111-2）。

りした。３年生のときは仕事の都合でよく欠席をし、先生方に迷惑をかけた」（北海道音別高等学校同窓会 1988: 58）と振り返っている。

３－４－２．音別高校の教員たち

同校の生徒数は、最も多いときでも 100 名程度と小規模であり、少数の教員によって定時制高校教育が担われていた。当時の教員体制をみると（北海道音別高等学校同窓会 1988: 16）、初年度は湖陵高校の教員３名が兼務し、翌年度は兼務教員１名、専任教員２名の体制であった。３年目の 1953（昭和 28）年には、音別村立に移行し「音別高校」となったため、専任教員３名の体制となった。しかし、専任教員だけではすべての授業を消化できなかったため、湖陵高校の教員や尺炭小・中学校の教員、さらに、尺別砿業所の職員を「時間講師」として招聘した。彼らは、日中の本務を終えたあと、夜間の授業（１校時 17:20-18:05、最終４校時 19:55-20:40、北海道音別高等学校同窓会 1988: 17-8）を担当した。釧路の湖陵高校から派遣された講師たちは、「汽車を乗りついで尺別炭砿まで行き、音別高校に直行、息つく間もなく夜の授業に入る、授業が終わるとその日は、砿業所の『職員クラブ』に一泊して翌朝、また汽車をのりついで釧路に戻る」という「大変肉体的、精神的負担」をともなった（北海道音別高等学校同窓会 1988: 16）。このように献身的な時間講師の存在は、「音別高校を支えたかけがえのない力であった」（北海道音別高等学校同窓会 1988: 16）。

専任教員をはじめ、炭砿地域に初めて赴任した教員たちは、炭鉱の子弟である生徒たちの状況をどのようにみていたのだろうか。1952（昭和 27）年に学校がまとめた「当校運営上の利点」には、以下の点が指摘されている。

１．生徒全員が尺別炭山従業員の子弟であり、且つ勤務時間も一定しておるので何かと纏まってやるのに都合が良い。
２．広い意味で一家族の形を造っておるので所謂家庭との連絡は執り易い。
３．校外指導はやり易い。現在のところ思想上に注意を要する者もいない。
４．不良化している者もない。
５．浦幌地区の生徒が一斉に転出して地元の生徒のみとなり、従而時間的に制約される度合が稍緩和された。

（北海道音別高等学校同窓会 1988: 18）

生徒たちが尺別炭砿と関連企業の従業員またはその子弟であるという同質性、ならびに「一山一家」という地域の共同性を「利点」として捉えていることがわかる。加えて、このころ「尺別炭砿もまだ増産の時代だったこともあって、炭砿の人々の生活も平穏な空気」につつまれていたため（北海道音別高等学校同窓会 1988: 18）、生徒の状況を肯定的に捉えることができた。

また、教員と父母とのつながりは、教員の回顧録からもみられる。1953（昭和 28）年、初任校として同校に赴任した赤坂忠亮氏（専任）は、「炭砿の人たちとの交わり、何もかも初体験で、文字どおり五里霧中の生活」を送りながらも、「次第に受け持ちの３期生だけでなく、２期生、１期生の人たちとも家族ぐるみ（中略）の付き合いが出来るようになりました」と述べている（北海道音別高等学校同窓会 1988: 100-1）。尺炭小・中学校の教員と同じく、音別高校の教員も父母、

地域と強固に結びついていたのである。

３－４－３．主体性を重んじる教育

また、尺炭小・中学校で重視されていた生徒たちの主体性や生徒会活動も、音別高校において盛んであった。なかでも、生徒会機関誌「あしあと」（生徒会文化部発行）ならびに機関紙「標灯（のちに「標燈」）」（生徒会新聞部発行）の編集・発行、そして、文化祭（学校祭）が挙げられる。「あしあと」は、1953（昭和 28）年の文化祭で編纂された文芸作品集に始まり、生徒たちはもちろん、専任教員や講師の作品も多数掲載された機関誌であった。そして、文化祭（学園祭）は、1年で最大の行事であり、尺別のなかでも一大行事であった。特に、1954（昭和 29）年の開校３周年記念文化祭では、クラス対抗のスポーツ競技（野球、排球、篭球、卓球）やカルタ大会、レコード・コンサート、写真展示、演劇等が行われた。なかでも演劇の上演は、「砿業所唯一の娯楽施設であった『協和会館』を借りて」行われ、「地元の小・中学生や、炭砿の人達も多数つめかけ、初の高校の演劇発表に注目した」（北海道音別高等学校同窓会 1988: 37）。前述の赤坂氏は、この演劇上演について、「地域にとけ込んだ学校の姿というものを素朴に感じとったのもこのときでした」と評価している（北海道音別高等学校同窓会 1988: 102）。

このほか、プロのピアニスト、歌手を招いての独唱会（1954 年９月７日、川崎静子独唱会）が同じく開校３周年記念に開催され、「当日は予想外の大盛況で約 600 名の入場者があった」（北海道音別高等学校同窓会 1988: 34）。上記の機関紙に「この地域社会の文化の高揚に少しでもプラスし得たことと、生徒会の貴重な経験になったということは大きく評価さるべきであろう」とあるように（北海道音別高等学校生徒会新聞部 [1954]1988: 34）、同校生徒たちにとって成功体験となった。こうした生徒会活動の背景には、同校の専任教員はもちろん、時間講師を務めた尺炭小・中学校の教員らの支援があった[8]。

また、生徒たちの進路については、大半が在学時に勤めていた炭鉱関連業の継続を志望していたが、なかには、大学等進学を希望する生徒もいた。彼らは主に、北海道学芸大学釧路分校（現、北海道教育大学釧路分校）に進学し、教職を目指した。そうした進学希望者のために、専任教員らが補習をおこなった。前述の赤坂氏は、「授業が終わったあとの寂しい校舎の片隅で」「新しい憲法のことを一生懸命勉強したり、模擬テストをやった」（北海道音別高等学校同窓会 1988: 37）と記憶している。この結果、第１期生からは学芸大釧路分校に４名が合格し、その後、釧路管内を中心とする各小学校で教鞭をとった。

３－４－４．音別高校の閉校

以上のように、音別高校では、尺炭小・中学校と同じく生徒の主体性を尊重した教育、学校運営が行われ、向学心ある生徒たちの後期中等教育機会を提供してきた。しかし、1950 年代後半から入学者数の減少、中退者数の増加から生徒数が減少し、1960（昭和 35）年度には生徒の募集停止、そして、1962（昭和 37）年に閉校をむかえた。閉校に至った要因として、同校の記念誌には、「石炭産業の斜陽化という激浪」と、それにともなう「雇用最優先の生活」、さらには生徒たちの

[8] たとえば、上記の独唱会は、尺炭中で音楽を担当していた金谷昭二氏ら教員の尽力によって開催された（北海道音別高等学校同窓会 1988: 34）。

他出志向（白糠、釧路など）を挙げている（北海道音別高等学校同窓会 1988: 19）。特に、学区内の白糠高校は、尺別駅から 30 分弱で通学可能であり、1957（昭和 32）年には全日制課程２学級、定時制（夜間）1 学級が設置されていた。実際、1950 年代後半の主な進学先は、白糠高校であり、1959（昭和 34）年のデータでは、白糠高校（定時制）に占める尺炭中出身者の割合は 10.3%（45 名）と、白糠町内の白糠中学校、庶路中学校に次ぐ生徒数であった（北海道白糠高等学校創立 20 年史編集部編 1969: 59）。

こうした経緯から、音別高校は、最後まで独立校舎を持つことなく、わずか 11 年の歴史に幕を下ろした。1962（昭和 37）年３月４日、最後の卒業式では、音別高校第８期生の代表が、以下のような答辞を読んでいる。

> 高校生活を偲ぶべき校舎は過去にも現在にも未来にも存在しません。如何なる学校の如何なる卒業生よりも感慨ひとしおであります。（中略）若し、苦しかったこの４年間にあのやさしい先生方の御指導がなかったら、又励まして下さる理解ある職場の上司が居なかったらばと思うと今日の私達は本当に幸福であると思います。（中略）私達はこの４年間の尊い教訓を明日からの生活に活用したいと思います。（北海道音別高等学校同窓会 1988: 29-30）

音別高校の卒業生は 126 名にとどまるが、彼らは４年間の高校生活でその後の人生に欠かせない経験や学歴を獲得した。こののち、さらなる炭鉱の衰退と閉山を迎え、再就職と職業転換の際に、音別高校での経験が活かされることになる。

４．教員闘争と炭鉱衰退のなかの尺炭教育：1960 年代――集団主義教育と地域共闘

前節でみたように、1950 年代、炭鉱好況期のなか、尺炭小・中学校ならびに音別高校において、生徒の主体性を重んじ、父母・地域提携の尺炭教育が確立していった。しかし、1960 年代に入り、炭鉱や教育界の状況が変化した。尺別炭砿は、石炭産業斜陽化の波を受け、希望退職者の募集や減耗無補充などの合理化が進められ、従業員数は 800 人を下回った。そして、1961（昭和 36）年には、「尺別事件」（共産党系組合員の生産妨害容疑で解雇処分）が起こり、1964（昭和 39）年には隣町白糠の明治鉱業庶路炭砿が閉山するなど、炭鉱の衰退ムードが漂った。前述したように、音別高校の閉校は、こうした情勢を象徴している。また、教育界では、反動文教政策や特設道徳の設置、全国学校テスト実施等、国家統制に対する教員組合の反発が起こり、組合活動の分岐点をむかえる。加えて、高校進学の標準化と高校受験競争の激化により、全国的に中学校教育の変容がみられた。

このように変動する状況下で、尺炭小・中学校の教員たちは、どのような教育実践をおこなったのだろうか。簡潔に述べると、両校ともに、「集団主義教育」[9]という教育方法がとられる。その

[9] 宮坂（1962）によれば、集団主義教育は、「教師も含めた学級集団の集団構造の民主的原理に立っての質的変革過程を中軸として学級集団へのはたらきかけを考え、その線に立って学級づくりの具体的手立てを講じていく教師の立場」であり、「ここでは子ども集団自身がそれらの環境に能動的にはたらきかけ、そこにひそむ矛盾を見ぬき、しかもその矛盾を科学的組織的な方法で打開していこうと努力」し、「集団の主体的な規律をつくりあげ、しかもその目的的な集団活動のなかで自己をよ

結果、父母・地域提携の尺炭教育は、どのように変容したのだろうか。以下では、尺炭小・中学校ごとの各実践についてみていく。

４－１．尺炭小における集団主義教育――教師・児童集団の変革を目指して

尺炭小では、周辺各地の小学校において次第に強化されていく教員組合分裂工作や管理体制の強化を受け、教師集団の変革と団結を推進した。当時の校長は、釧路の組合活動を主導していた高沢慶次郎氏（1960-67 年勤務、釧路教育研究所所長）であり、教員たちは、来る管理体制の強化を想定して、「職場づくり」[10]に取り組んだ。この活動を主導していた当時の教員たちの状況認識について、以下のように記録されている。

> 体制側の攻勢が次第に強力になり組織分裂工作が明確になり露骨になってきている今日、教師集団の団結と連帯が単なることば上やポーズのそれとしてうけとられ終始するのではなく『仕事』を通し『事実』を通し『行動』を通して認識されていかねばならない。（尺別炭砿小学校 1965: 1）

こうした認識のもと、1964（昭和 39）年度から「生活職場サークル」、「学級づくりサークル」、「父母提携サークル」の３つのサークルが編成され、さまざまな実践が行われた。以下では、それぞれの活動記録から、教師ならびに児童集団の変革とこの時代の尺炭教育の特性についてみていく。

４－１－１．職場づくり――生活職場サークルの活動

「生活職場サークル」は、1964（昭和 39）年度、「事実・実践・授業を大切にする職場集団をつくろう」というスローガンのもと、「職場づくりと教師集団の変革を目指す研修を深め」、直面していた諸問題、とりわけ、「学校管理規則改悪阻止の斗い」（「総務のいちづけ」、「校長をどうとらえるか」）および「特設道徳を実施するのか、しないのか」について、「教師集団を解剖して、個々の意見を充分出し合った」（尺別炭砿小学校 1965: 9）。具体的な実践としては、授業公開や記録、学校行事の変革、そして、何よりも『職場史』の編纂・発行を挙げている（尺別炭砿小学校 1965: 10）。

『職場史』は、1964（昭和 39）年度から生活職場サークルが中心となって発刊した校内機関誌である。同サークルのメンバーは、熊野清氏、渡辺五郎氏、田村雅志氏、小場昭秋氏（兼、釧路教育研究所専任所員）といった釧路管内民間教育協議会等で活躍する教員たちだった。『職場史』の主な内容は、各教員の学校・学級経営（学校・学級づくり）、教科教育、生活指導、行事活動の実践、組合活動（反対闘争運動など）が記録された。これは、生活職場サークルが教師集団の団結と連結を目指すために、職場において「『何がどうとりあげられ、どのように変わってきたのか』そのことを明確にすることが職場の発展にひとつの役割をになうと考えた」ため、発刊された（尺

りたくましく社会的にきたえあげていこうとする」ものである（宮坂 1962: 130-1）。

[10] 小森健吉（1958）によれば、教師の職場づくりは、「第一に、学校内における望ましい教師集団形成、第二は、職員室の、第三には学級の、第四には、学校の望ましい教育状況化という意味である」（小森 1958: 86）。

別炭砿小学校 1965: 1)。しかし、初年度においては、十分に活用されるに至らず、来年度にむけて「『職場史』を、職場づくりの中に、学校づくりの中に生かす方向をみつけだす」、「教師の意思統一のための具体的な方向を見出す」、「われわれの団結と、相互の連携」、「日常の小さな問題にも、真剣に苦しまねばならぬ。努力しなければなら」ないという 4 点を課題として挙げている（尺別炭砿小学校 1965: 10-1)。

翌 1965（昭和 40）年度、生活職場サークルは、活動方針を決定するにあたり、以下のような「教師としての生活や労働に関しての基本的な考え方」をまとめた。

> 教師の労働は、日常の授業を中心として子どもたち、父母、地域社会、学校などをとりまく、諸現象を分析し、よりよい子どもをつくるための学校にしていくものと考える。そのためには、教育に関する専門家として、常に研修し 1 日の怠惰も許されない立場にある。そして、その営みが、単に個々の教師にだけ要求されるものに止まらず、教師集団という共通の問題領域に立って、集団としての義務づけの中で、常に前進的な態度で臨まなければならない。（尺別炭砿小学校 1966: 19）

このように、授業を中心としつつ、子どもたちを取り巻く環境を対象に、「教育に関する専門家」として、個々の教師ではなく「教師集団」として臨んでいかなければならないとしている。一方、「教育労働者」としての自覚を持ち、「時間的な問題や身体的条件」を考慮して、「私たちの生活に立脚したものの考え方、労働者の立場に立った意識の確立」を明確にしてく必要があると続けている（尺別炭砿小学校 1966: 19)。

こうした基本方針に則り、以下 3 点を中心に取り組んだ。第一に、「写本」である。「先達の遺産に学ぼうのかけ声のもと」、「理論と実践を統一し、教師自身が経験べったりの中ではいまわることから脱皮する為にも、思考を深めるためにも、本を読まなければ」ということから写本活動が始められた。全員が輪番制で新書『なぜ集団主義を選んだか』（大西忠治著、1965 年）を写本することになったが、「予定をはるかに遅れ、ついに生職部会だけでガリ切りをする状態」になった（尺別炭砿小学校 1966: 14)。また、「熱心に読み込んだ中から、生々しい感想文が出されたが、それについてのつっこんだ討議が持たれないままに終わってしまった」。生活職場サークルは、この要因を「ガリ切りに要する時間的・精神的苦痛」としながらも、「日々の実践と結びつけて考えているのか」と疑問を投げかけたうえで、以下のように反省している。

> 集団主ギ教育をめざす職場の中できびしさを忘れた仲間全体のルーズさはあらゆる角度から批判されると共に、忙（ママ）が しいという毎日の生活をふりかえる時、「写本」についてもう一度我々は何をねらっているのか確かめあう必要があると思う。（中略）写本活動を通して、職場では、記録をもとに実践討論会を！技術もさることながら、それを支える教育思想の確立を！etc.（尺別炭砿小学校 1966: 14）

このように、写本活動が教員間で十分に展開できなかった原因として、教師集団の「ルーズさ」を指摘し、実践と理論の統一、「教育思想の確立」を目指して、写本活動のねらいを再考しようと提唱している。他方、成果として「子ども達のしあわせをねがう教育に向って意識のもりあがり

ができてきた」点を挙げており、「この成果をガッチリとおさえて未来へつき進みたい」とまとめている（尺別炭砿小学校 1966: 14）。

第二に、生活職場サークルは、写本活動を継続できなかった一要因である「教員たちの多忙さ」、「労働時間の短縮」（校務の効率化）に取り組んだ。そもそも尺炭小の教員は、「みずから忙しさを求めて苦しみ、そして高まろうと」する傾向があった（尺別炭砿小学校 1966: 15）。しかし、長時間にわたる研修・会議等によって「学級・学年の問題をたしかめることや、自己研修」が「二の次、三の次とな」ってしまい、「心身共に余裕のないことが多く、研修そのものは勿論のこと、小委員会活動、学級づくりなどに全力を集中できぬことが多かった」（尺別炭砿小学校 1966: 15）。そこで、生活職場サークルは、「週プロ」（１週間のプログラム）を設定し、教員たちに「教育労働者」としての自覚と労働時間を明確にさせた。具体的には、「月曜日：自己研修、火曜日：全体および部会研修、水曜日：職員集会、木曜日：全体および部会研修、金曜日：学年部会、土曜日：レク（１・３週）・終会（２・４週）」（尺別炭砿小学校 1966: 15）というプログラムである。自己研修日を設けるなど、「ゆとりを持とうということを根っ子に編成された週プロ」だったが、「かなりの成果があった」として、以下の４点において、教師集団に変革がみられたと指摘している（尺別炭砿小学校 1966: 15-6）。

１．労働時間についての考慮がなされており身体的、精神的な余裕が生じた。
２．自己研修日が設けられたことによって学級や自己の身辺に目をむける時間が多くなった。
３．部会、小委員会では、計画的、継続的研究がなされた。
４．学年部会では、形式的な進度の打合せから指導の内容についての検討がなされるようになった。

ただし、「時間や日程がはっきり無理という段階でも、どの学年からも、だれからも、また生職サークルからも問題として出されな」かった点は反省であり、「確認」を大切にする教師集団への変革を課題としている（尺別炭砿小学校 1966: 16）。

そして、第三は、週プロの土曜日に設定された「レクリェーション」の開催である。この目的は、①「頭を仕事から解放し休養をとる」、②「教師の仲間意識・集団意識を高めていく」ことであった（尺別炭砿小学校 1966: 13）。第一・第三土曜日の午後に設定され、種目は、４～11 月にバレーボールとソフトボール、12 月にバトミントンと卓球、１月に百人一首、２月にスケート・理科実験、３月に器楽であった。いずれも集団で行う種目が選ばれ、全員参加が原則であった。しかし、実際には参加できない教員もいた。「土よう日の午後をレクに使用することは問題があったように思われる」と検討の余地を残す一方、「全員参加が不可能ならどんな方法で仲間・集団意識を育てていくか」が課題であると指摘している。

以上のように、生活職場サークルは、写本活動、週プロ設定、レクリェーションの開催を通して、尺炭小教師集団の変革（教育労働者の自覚、仲間意識や集団意識の醸成）を目指した。このほか、職場を「何でも言える場」にするために、教員同士の呼称は、校長を含め、「〇〇さん」で統一されていた。職員室の清掃も、教員自ら行うように変更し、子どもたちに態度で示した。教員同士に不信感はなく、それぞれ弱点を自覚しながら、互いに克服していったという（2018 年７

月坂野氏インタビュー)。これらの職場づくりは、「体制側の攻勢」に対抗するために企図されたのだが、もちろん、その基底には子どもたちの教育があった。

４－１－２．学級・学校づくり――学級づくりサークルの活動

- 1964（昭和 39）年度の実践

児童に対する教育実践は、「学級づくりサークル」を中心に集団主義教育にもとづいた学級づくりが展開された。1964（昭和 39）年度、高沢校長の発議（「集団主義教育の必然性」と題した理論研究と実践の方向）による職場討議、および国内の代表的論者である宮坂哲文東京大学教授らの論稿の輪読など、教員同士の学習を進めながら学級づくりを行った。この年の『職場史』第１号には、低・中・高学年ごとに、その内容と今後にむけた課題および反省が示されている（尺別炭砿小学校 1965: 21-4)。

低学年部会担当の大山良子氏（1963-67 年勤務）は、１年生たちが「丈夫で明るく素直にあまえないで、自分のことは自分でできるように」するという目標をもとに学級づくりを始めた。しかし、「他人をおしのけても大声で自分のことを話そうとする子、机に座ったまま、無表情に全然口をひらいてくれない子」がいて、思うように進まなかった。そこで、「見通しの表」を用いた「より具体的な目標の必要性にせまられ」、「何でも言える信じあう雰囲気をつくり、みんなでみんなを生かすように仲よくする」、「自分のいいたいことはいおう」、「間違ったことやおかしいと思ったことをみんなで話し合って解決しよう」という目標を改めて掲げ、「何人かの口をひらかなかった子ども達はけんかやもめごとを通して、みんなの前で自分のことをいわなくてはならない必要性にせまられ」た。これにより、何人かの子どもたちは「いわなくては負(ママ)んだということを学び、正しいことは正しいと認めてくれる、みんなの前では嘘はいえないということ」を習得した。ただし、依然として生活や授業では「最小限に必要なことしかいわない」児童がいることについて、大山氏は自身の反省を込めて、以下のように評している。

> このような子どもがいることはまだ私と子ども達一人一人の心が暖く結ばれていないことであり、これはさらに私が一人一人をとらえるだけでなく、それを子どもたちみんなのものに広げていかなかったからである。クラスの子ども一人一人が教師と心がかよいあっていなくては集団主義をめざす教育はもとより、決して何の教育もできないと思う。(中略）教師のものの見方、考え方、感じ方、生き方、日常的な接触の中で無意識のうちににじみでる教師の人間性の豊かさや真実を求めてやまぬ厳しさ……。確かにそう感じる。しかし、今の私達はこういう言葉や子ども達の心のこもった行動を瞬間的な炎を燃やす以前に忙しさの中で子ども達の心をふみにじってはいなかったろうか。と(ママ)うりいっぺんのことばや行動で終ってしまってはいなかったか。愛情の眼差しをもってじっくりと子ども達をみつめている時があまりにも少なかった。誰のための何のための教育なのか、はたして価値ある忙しさなのかもっとみなおす必要があると思う。(尺別炭砿小学校 1965: 21-2)

このほか、大山氏は、班づくり・集団づくりにおいて、子どもたちの活発な活動が見られたからといって、教師である自分自身が「自己満足をしてはいなかったろうか」、「単なる仲良しは集

団主義でないばかりか集団主義の生育を情緒とムードでつみとってしまう結果になってはいなかったか」等、反省を述べている（尺別炭砿小学校 1965: 22）。

また、中学年部会の江尻元氏は、「日直制度」や「班づくり」を進めたが、「（班日直が）責任を転化（ママ）」したり、教員の「点検のきびしさ」、「班追求のきびしさから」、「学級に人間的なあたたかみをなく」すなど、難航したと記している。そのうえで、江尻氏は、集団主義教育と尺炭教育を結びつけ、教師集団の自己変革の必要性を説いている。

> 討議づくり、班づくり、核づくりの三原則が集団主義教育の亜流になっていないか。その３つをやっていれば集団主義教育をやっているとはいえまい、尺炭教育の構像（ママ）の中にある「一人のよろこびはみんなのよろこび、一人のかなしみはみんなのかなしみ」のキバンをしっかりふまえて、実践をみつめなおしてみる必要はないか。／班づくり→集団を認識して、集団を学ぶ。／核づくり→集団の中で指導力を育てる。／討議づくり→集団の力を自分たちの力であることを自覚する。（中略）まず教師みずからが集団主義的人間としての生活態度や活動（行動）をしているかということと、科学的、分析的な視点にたって、絶えず子どもたちの実質をとらえ、それをみちびく指導のみとおしと手だてを検討し、創造しているかということである。そのためには教師集団の問題は学校体制の中で重要な意味をふくんでいるのではないだろうか。（中略）教師および教師集団に、集団主義的連帯と行動が生み出されていく過程こそ、真に集団主義をつらぬく教育実践が創造されていくのではないだろうか。（尺別炭砿小学校 1965: 23-4）

江尻氏は、尺炭教育の構造に集団主義教育のテーゼがもともと組み込まれていると解釈し、尺炭教育を基盤に集団主義教育を展開していこうとしている。ここから、尺炭教育と集団主義教育の親和性がみてとれる。

そして、高学年部会兼学級づくり部会の石森昇氏、井川謙一氏は、「たしかに学級実践の方向と内容は集団主義教育を志向」しているが、「教師のいわゆる『学級づくりの姿勢』によって実践の深まりが異なってい」ると指摘している。そして、低・中・高学年を総括して、「①中学年から高学年（に）いたる学級づくり、②学級集団の自主管理をどう指導するか」という問題点を挙げ、次年度にむけた課題として、「資本主義体制下における（１）集団主義教育の見通しに立つ教師集団の姿勢確立、（２）集団主義教育の思想性――教師の思想性の統一、（３）きびしさとあたたかさを持つ教師の人間性確立」を挙げている（尺別炭砿小学校 1965: 6）。

- **1965（昭和 40）年度の実践**

翌 1965（昭和 40）年度は、尺炭小全職員の「約５分の２が新人（転任者）」となるなか、各学年で学級づくりが推し進められた。学年ごとの取り組みは以下の通りである（尺別炭砿小学校 1966: 7）。

１年生　係を中心とした班、班活動をとおしての追求、班点検を通しての問題のほりおこしなど、実践的に明らかにされてきた。班による幼稚園に入らない子の変革、転入児童の変革の実践は、１年生での班づくりの可能性を実践的に明らかにされた。

２年生　楽しみ会を通しての集団づくり、特に、一人一人の持っている力が明らかにされ、その結集が楽しみ会の成功に結びついたり、楽しみ会を通しての集団のきまりを定着させて行く実践は、２年生の実践として特徴的なものであった。

３年生　学級編成後の３年生に於いて、討議することの必要性や教師によりかかりのバラバラ集団を組織して行く一方法が打ち出されている。学級編成後の学級づくりの実践の方向をより明確にすべきであった。

４年生　特に教師の権威に対決する実践が明らかにされた。教師への点検から、子ども集団の自主管理の方向や、要求を組織していくことの大切さ、又その要求の質的発展や、要求に伴なう集団の質の変革は、４年生の実践で明らかにされた。

５年生　遊び場問題を通して週番点検の甘さを鋭くつく―先生だからといって…―実践、班集団と班集団とのかかわりの実践の方向は、特異なものである。

６年生　パンをやいてたべたいということから、教師のあやまりを正そうとする実践、役選や班替えを通して集団意識を高めた実践、集団否定の学級の一部集団に対して各集団の組織を通して、崩かいせしめて行くＡ子の実践など多様である。集団の質的変革をみつめながらの実践は、６年生の実践の特徴でもあろう。

ここでいう「討議内容」または「点検」の対象は、学校行事等、学校や学級全体の問題に限らず、ある児童の具体的な生活態度や問題も扱われた。たとえば、児童が綴ったつぎの詩には、同年度の学級づくりで、あるクラスメイトを取りあげて「集団を高める」ようすが描かれている。

「先生が○○ちゃんのことについていったことば」（６年女子）
先生が○○ちゃんについて言った／さみしく　あわれに／△△君のいる前で／いやだろうつらいだろう／話しがおわってもふせていた／見ている人もつらい／先生　集団を高めるために／１人の人をぎせいにする／やめて　いわないで／集団を高めるためなら／○○ちゃんの手紙のことでなく／ちがうことで　高めて
（でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 159、個人名は引用者加工）

こうした実践によって、教員たちは、厳しさと温かさを持つ人間性の確立を求められた。特に、高学年では、子どもたちから教員への要求も厳しく、教員たちの力量が試された。たとえば、４年生部会の教員による振り返りからは、子どもらと教員の間に緊張した関係がみられる。

時間がかかる。むだが多い。結果は見えている。教師はきめつけようとする。甘いだきあわせ案を提示する。子どもは厳然としてはねつける。してはならないことをあえてしなければならない教師の矛盾――時間がほしい。この中から、生活日記をつけて、自分の生活をきちんとした目で見つめさせようとするが、問題にぶつかるたびに毎にまようばかり。又集団

におろす。互いにアゴを出すこともしばしばであるが、この苦しい斗いは、ねらいをそらさず今後も続けていく覚悟？である。（尺別炭砿小学校 1966: 39）

同年、学芸会のプログラムを教員が児童らの生活を考慮せずに決めようとしたとき、子どもたちから「先生は、勝手にプロを変更しているんだ！」という意見が出た。これを機に「子どもたちどうしの中で起る差別と偏見、今までおさえていたうずきがあちこちでふきだしてきた」。社会科や国語科の学習では、子どもたちは矛盾を突き出すようになった（尺別炭砿小学校 1966: 40）。

こうした子どもたちの「質的変革」に対し、４年部会３名の教員は、部会の中で真剣に話し合い、「真の教科書研究の重要性」を認識し（尺別炭砿小学校 1966: 40）、「教師集団と子ども集団がしっかりと手をつなぎあって」、「より良い自分達（子ども・教員）の生活をつくり出していく」ことを目標に設定した。そのために、「炭砿（やま）の実態を知り、農家の現状を知る努力を怠ってはならない」、「父母との心の通う結びつきを忘れては、私達のめざす教育は成り立たない」と、児童を取り巻く家庭・地域・産業の状況を捉え、父母との連携を重視している（尺別炭砿小学校 1966: 40）。

このように、学級づくりの実践は、子ども集団と教師集団の緊張関係のなかで展開され、双方の質的変革をもたらす実践であった。1966 年度の特徴、成果として、以下の５点が挙られている（尺別炭砿小学校 1966: 7-8）。

① １年生で班づくり、核づくりは可能であることが、或る意味で実証された。
② 文化活動を通して、集団の質をかえたり、集団の力量をゆす（ママ）ぶられたり、集団のきまりを定着させたりする実践がみられたこと
③ 権威（教師）に対して鋭くつきささり、学級学年の集団を組織して行く実践がみられた。特に、要求を組織する過程で、集団の質を問われ、集団変革をして行った事実は、集団が集団に学ぶと言うことを実証してくれたこと
④ 一部の学級ではあるが、核集団が学級の中に生れてきた実践は、今年度の足跡に残しておきたい
⑤ 学校ぎ会、討議集会が学級の要求をえぐり、ほりおこす方向があったこと、即ち、学校集団づくりと学級集団づくりがきちんと絡み合っていたことも忘れてはいけない事実である

このように、学級づくりの成果がみられただけでなく、上記⑤にあるように、学級集団を基盤に「学校づくり」にまで発展した。たとえば、前年度まで学校議会（校内の最高決議機関）には「生活委員」が参加していたが、「学級集団の高まりを重視」して、「学級代表にきりかえ」た。これにより、「子どもたちの学校議会に対する自覚の現れ」がみられるようになった（尺別炭砿小学校 1965: 11）。この年、学校議会では、釧路共栄小学校の事故[11]に対して、「その原因・処理に対してまで深くほりさげた討議がなされ、単なる情緒的な面でなくして、仲間なんだ！自分たちの

[11] 1965（昭和 40）年 10 月５日、新富士海岸に漂着した旧日本軍の不発弾が爆発。炊事遠足中だった共栄小学校児童および教師のうち４名が死亡、32 名が重軽傷を負った（釧路市地域史研究会・釧路市地域史料室編 2006）。

手足を動かすんだという方向」に向かい、募金ではなく「はげましの手紙」を送ることに決定した（尺別炭砿小学校 1966: 11）。そのほか、校内行事についても、「これまでにない、学級・学年での討議の深さ、自分たちの集会であるという自覚が出され」、教員も「スバラシイ成果であった」と評している（尺別炭砿小学校 1966: 11-2）。また、討議集会（全校集会）も活発化し、教師によりかからず学級集団が真剣に取り組んだうえで、校内に関する問題提起が生まれたという（問題の内容については不明）。

以上のように、この年の実践は、いくつもの成果があったと評されている。児童集団に関しては、「権威に対してきびしく抵抗し、要求を組織するということは、集団が集団を変え、集団が集団に学ぶという集団主義教育の明らかな成果」であるとし、教師集団に関しては、「裸の実践を職場の中に打ち出し、その多様な実践に学び合う」「実践討論会」を通して、「教師の自己変革のすじみちを大切にしたい」としている（尺別炭砿小学校 1966: 8）。そして、次年度にむけて、「今年度のように、子ども集団の要求が教師集団にもちこまれる時、教師集団の統一が大切にされなければならない」（尺別炭砿小学校 1966: 8）、または子どもたちの要求を「おそれては何も出来ないし、本物にはなってこない」ため、「もっともっと自分を見つめていかねばならない」と教師集団変革の必要性を述べて結んでいる（尺別炭砿小学校 1966: 12）。

４－１－３．地域共闘と父母提携――父母提携サークルの記録を中心に

これまでの各サークル活動にみられたように、尺炭小の教員たちは、尺炭教育の根幹でもある「地域・父母連携」を重視していることがわかる。しかし、石炭産業の合理化と教員組合活動の激化により、変容を余儀なくされる。1964（昭和 39）年度、「父母提携部会」担当の山内章氏は、以下のように振り返っている。

> 私たちが過去数年、父母提携をおし進めてきた成果は着実なものとして評価されていた。しかし、本年度に入り、石炭産業の合理化の波にもまれた従業員家庭、あるいは学校統合による校域拡張等により父母の教育要求が大きく変わってきた。過去の提携活動が大平ムードの中におし進められて来たとは決して思っていないが新鮮味の見られなかった本年度の活動は第一に反省させられることではないだろうか。（尺別炭砿小学校 1965: 7）

この年、４月には尺別原野の尺別小学校が尺炭小に統合された。尺炭小の教員たちは、「もっともっと現実の父母の生活をみつめる中から父母の教育要求を正しくうけとめ、分析していかなければならないという意識」を持っていた。しかし、実際は「『話し合いの中から･･･』とか『子どもを通じて･･･』とかのムード的な安易な考えで行動に移されていた」と反省している。そのうえで、今後の課題として、以下の５点を挙げている（尺別炭砿小学校 1965: 7-8）。

１．石炭産業の合理化が与える影響をどう捉えればよいか。
　①　推移の実状、②　離職・転職の原因、③　労働賃金、④　共が（ママ）せぎ、⑤　非行化
２．父母の教育要求は何か
　①　教育要求にはどんなものがあるか、②　社会情勢にどう影響されているか
　③　日常の実践化

3．マスコミの影響はないだろうか
独占資本の反動攻撃（このことは父母の物の見方、考え方に大きな影響を与えていないだろうか。）
4．実践の場で何を学びとったか――それがどう父母と結びついたか。
① PTA 組織・活動、② 学級づくりとのつながり、③ 平和運動を進める中で
5．国民教育運動をおし進めるための方向や、課題を明確にしなければならない。
① 政治的、思想的な観点、② 実現するための実践が運動の全体の中で占める位置

このように教員たちは、石炭産業の合理化によって翻弄される父母の生活実態と教育要求の把握を課題としていた。教員たちは、それぞれ担当の地域を回り、「地区懇」を開いて学級の問題や教育の無償化等の要求を把握した（2018 年３月大山氏インタビュー）。また、学年・学級通信や学習プリントの発行、移動教室を実施した。

しかし、その効果は、十分でなかった。たとえば、１年部会は、家庭学習の効率化を図るため、「家庭学習プリント」を作成・配付し、移動教室で検討したが、「『プリントだけはやる』といったところが本当の姿であり、このことは父母の家庭学習に対する意欲にも問題はある」と指摘している（尺別炭砿小学校 1966: 33）。また、３年部会は、学級通信を発行して、父母が「自分の子どもが、今学校でどんなことをしているか、どんな勉強をしているかを知り、理解して、中味のある家庭学習につながってい」くように働きかけたが、教員からの「一方交通(ママ)に終った」としている（尺別炭砿小学校 1966: 38）。石炭産業合理化のなか、父母の教育要求、教育理解は、決して高くなかった。

他方、教員たちは、地域共闘の動きを進めるため、父母の政治的思想の把握を進めた。教員らは、1964（昭和 39）年に尺炭中と合同で実施していた「学力テスト反対斗争」のなかで、地域共闘の必要性を見出し、翌年８月 21 日に「尺炭地域共闘会議」を発足した。その年の『職場史』における「父母提携の総括」は、「地域共斗」が主な内容であった。成果として、①「高校大学区制反対運動」（二千数百名の反対署名を集め、町議会の反対決議をあげる）、②「反戦平和運動」（2,000 名あまりの署名と約２万円のカンパを集める）、③「これらの諸活動を教師自身行動化し」、「生きている現実の問題にふれることができた」点を挙げている（尺別炭砿小学校 1966: 3、括弧内原文ママ）。特に、③にあるように、教員たちは、地域共斗会議を通して「職種のちがう単位労組や団体」が抱える問題に触れ、同じころ結成された「石炭危機突破・産炭地振興音別地域共斗会議という組織ができた（本当にできただけ・形だけが）が、こういう組織との関係をどのよう考えていくとよいのか」等（尺別炭砿小学校 1966: 4、括弧内は原文ママ）、改めて石炭産業の衰退と直面する機会となった。

こうした地域共闘、組合活動を通した父母提携により、教員も「教育労働者」という側面を認識する一方、「地域のインテリゲンチャ」として「文化活動を組織するという側面」を意識するに至った（尺別炭砿小学校 1966: 5）。そうした教員たちに対し、父母たちは大方支持した。当時、尺炭小に勤めていた大山氏は、「母親がフォローしてくれました。今なら排斥運動がおこるかもしれないが、地域づくり部会とか、教育の無償化と関わって、教育がどう統制されているのかということに、PTA 文集を書いてくれたり、学級通信の誤りを指摘してくれた」（2018 年３月大山氏インタビュー）と振り返っている。なかには「教師が政治運動について語ることをきらっている」

（尺別炭砿小学校 1966: 51）父母がいたが、教員たちは闘争を進めていくためにも「父母に、政治と教育の一体関係、政治の教育支配ということの不当性を究明していかなければならない」とした（尺別炭砿小学校 1966: 51）。そして、あくまで教員たちは、子どもたちの幸福を第一の目的とし[12]、大半の父母もそれを理解していたため、その後も地域・父母提携は、継続していった。

４－１－４．校内詩集『でか・ちび・のっぽ』

そして、もう一つ、この時期に特徴的な取り組みとして、校内詩集『でか・ちび・のっぽ』の編集・発行が挙げられる。この詩集は、子どもたちが「生活をみつめ、考え、書き綴り、生活を高め創造」するために編まれたもので（尺別炭砿小学校 1966: 29）、編集委員会が児童の応募作品から選考し、1964（昭和 39）年度に９号まで、翌年度は月刊となり、21 号まで発行された。それまでは、「原始的手法」ながら「生活綴方のネウチを大切にし」、「学級１枚文集などが発行されていた（でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 182）。このように、この詩集もまた尺炭教育の歴史と伝統が生んだ教育実践の証である。発行初年度の振り返りには、以下のように記されている。

> 校内誌（作文）集を発行しようというめばえやうずきは、かつての職場の歴史や伝統の中に根ざしていた。（中略）勿論、現実的には作文の会のグループ（（渡辺）五郎・石森（昇）・井川（謙一）・小場（昭秋）等）が中心となって全体に提案（このときからこの仕事はグループではなくて、職場集団の全体のものとして位置づけられた）し軌道にのせたわけだが･･･。（尺別炭砿小学校 1965: 15、括弧内氏名は引用者による）

1965（昭和 40）年度には１～18 号までの合本が発行された。合本の冒頭で、高沢校長は「書くことで君たちが変わり／なかまが変わっていくような／あすをつくる／生活の歴史を書いていこう」と詩集編纂の目的を述べている。

この詩集によって、子どもたちは、作詩能力が上達しただけでなく、多様なテーマに関心を持ち、自身の考えや感情を表現できるようになった。編集委員の一人、大山氏によれば、１～18 号までに記載された詩のテーマ別分類は、「生活描写：78」、「人間感情：45」、「観察と描写：24」、「夢と願望の詩：14」、「考えている詩：13」、「考えを書く：12」、「働く詩：１」となっている（尺別炭砿小学校 1966: 31）。

最も多い「生活」に関する詩は、「お母さん」や「お父さん」、「友だち」や「先生」などを題材にした詩が多くみられる。以下にいくつか作品を示す。

> 「父は帰る」（６年男子）
> 黒い服　黒い顔　手／すべて黒い／そんな父――――。／その顔を見たとき／ぼくは　うれしい。／今日もぶじに帰った父／ぼくの心は動く／その顔は　ぼくたちに／「今　帰った」といっているようだ。／とうさん　ガンバレ！！
>
> （でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 141）

[12] 「子供の幸福を願う教師一人一人の胸の内からの教育的情熱に支えられる教育者エネルギーは、子供に向かってのみ発散されるものではない。必ずやそれは対社会的方向をもって、理解者を求める」。（小森健吉 1958: 97）。

「母」（６年男子）
かあさんは／たいへんだ。／給料日になると／すぐ／給食ひをはらったり／学給をはらったり／する。／そして／のこりのお金で／いるいや／たべものを買う／物価が上って／きゅうきゅうしている／かあさんをみていると／なんだか／かわいそうになる。
（でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 126-7）

「やくそくをやぶった」（６年女子）
７月 30 日／友だちとのやくそくをやぶった。／へんな気持／おっかない気持／女と女の／男と男の／やくそくをやぶる／ふゆかいな気持／おっかない気もち／おちつかない気持／やくそくをやぶるということ／そんなに　そんなに／いけないことなんだろうか
（でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 155）

「先生」（３年男子）
先生はいいな／いつもえばれる／いたずらをすると／「ちょっとこい」という／「おみやげやっか」／そしたらぼくたちは「やだ」という／「こんどからするなよ」／「うん」／「よし前へすすめ」／歩きながらぼくは／「先生ってえばれるからいいなあ」／と小声でいった
（でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 80）

そのほか、「考え」を書いた詩のなかには、「沖縄の問題、政府、戦争、平和、など現実をみつめる方向へ向いた詩」が多く、社会意識を醸成する機会にもなった。つぎの詩は、釧路共栄小学校の事故に関する詩である。

「ばくらい」
どうしてそんなばくらいがあるのか／むかし戦争で／使った　ばくらい／でも　20 年たってもまだある／そんな命とりになる／戦争やばくらい／いまでも“ベトナム”でしている戦争。／いまでも　使っているばくらい／そんなばくらいは／どこか広い土地へいって／全部ばくはつさせてしまえばいい／戦争も、ぜったいしない（ママ）ばいい。（でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 31-2）

このように、子どもたちにとって、作詩は家庭・学校生活ならびに社会をみつめ、考え、書き綴る機会となっていた。しかし、編集委員会が評するように、「生活を高め創造」するには至っていなかった。この要因として、編集委員会は、教員たちの指導方法や詩集の活用方法を挙げている。編集委員会は、「詩を書かせるといったことは職場の中で息づいてきてい」たと評価する一方（尺別炭砿小学校 1966: 30）、「書かせる視点が学級づくりの発展の方向ときちんと結びついていったのか」（尺別炭砿小学校 1966: 31）と疑問を呈している。さらに、編集委員会は、「働く詩」がわずか一遍であったことに対して、「この地域の特徴として子どもが大人の労働場面に直接ふれることは少ないが、労働をみつめる、考えるきびしさ、鋭いめは、もっともっと指導しなければならない」と指摘している（尺別炭砿小学校 1966: 31）。

これらを踏まえて、編集委員の小場昭秋氏は、今後の課題として以下のように述べている。

ボク達は詩を書かせることは教育活動の全面にかかわっておりさまざまな意義をもっていることの再認識の上にたって、「感動のあるいきいきした教室、すなわち詩のある教室づくり」「子どもの認識と現実の生活との結合」「ものの見方、感じ方、考え方、行動の仕方を育てる」といった基底の上に立って／①児童詩の授業構造と指導過程をどう考え実践していくか。このこととかかわって、詩作品の質的発展の順次性をふまえた指導の道すじの究明。／②生活綴方の遺産の継承という姿勢を釧路性音別性という生活台の条件の中でどう発展させていくか。／③児童詩の原型をきちんと分類、学習することと、作品評の観点や姿勢を明確にしていくこと。／④くらしを考える。どんな詩の何にこそ感動すべきなのかを明確にしていく。／⑤より多くの教室での実践の一般と更に組織的、継続的実践の組織づくり。／といった当面している問題点を今後どのように克服していくか、かかえこんでいる大きな問題である。（でか・ちび・のっぽ編集委員会編 1966: 187-8）

上記のように、詩教育は、教育全体に関わるという認識のもと、地域性に留意しながら、子どもたちの生活認識を深めていくことを課題としている。また、教員たちもこの実践を通して、組織づくりを進めようとしている。同じく編集委員を務めた大山氏は、のちに編集活動を振り返って、「どういう詩がいいのか、子どもをどうみていかなければならないのか、子どもは地域とどうつながっていて、どう関わっていくのかについて考えさせられた。この編集で、子どもの見方を教わった」（2018 年 3 月大山氏インタビュー）と振り返っている。このように、『でか・ちび・のっぽ』は、子どもたちに生活や社会に目をむけさせたと同時に、教員たちにも教育方針の再考を促す貴重な実践であった。

４－１－５．高沢慶次郎校長と教師集団

以上のような尺炭小教員らによるユニークかつ活発な実践は、随所で指摘したように、当時の校長である高沢慶次郎校長の尽力が不可欠であった。当時、尺炭小で教鞭を執っていた坂野寅雄氏（1959-66 年勤務）は、「尺炭小は高沢校長が変えた」と断言する。高沢校長は、かつて僻地校である霧里（むり）小学校において、校長兼唯一の教員として全校児童 20 名程度を相手に「集団づくり」をおこなった。こうした教育実践をもとに、高沢氏は、尺炭小における集団主義教育を推し進めた。1964（昭和 39）年、学校長は組合を離れ、管理職側にいたが、高沢氏は、「何より、教育をどう守るか、子どもをどう守るか、その基盤としての職場をどう守るか」を念頭に置いていた（高沢 1978: 46）。当時の方針について以下のように振り返っている。

周囲が感情的対立の渦巻く状況下でも、一度として職員を憎悪することはなかった。彼等はたとえ立場は違っても、あくまで教育そのものを成立させる為の連帯の一員であり、私の仲間なのである。憎しみ合ってどうして教育を成立させ得るのか、この固い信念を私は決して崩さなかった。（高沢 1978: 46）

また、教員たちも「我々の校長は、理解もあり、民主、我々の側」という認識のもと、組合活動はもちろん、各種実践活動を進めた（尺別炭砿小学校 1966: 19）。前述の大山氏は、「尺炭小の教育実践は、高沢先生が守ってくれたところがある。お互いがお互いを大事にしていた。安心感が

あった」と振り返っている。高沢校長の教育理念と教員らの校長に対する信頼によって、職場内分裂は回避されていた。

それゆえに、1966（昭和 41）年 10 月の「10.21 闘争」[13]は、すでに組合組織から離脱していた高沢校長と教員との間に、「断絶」を生む出来事となった。高沢氏は、以下のように振り返っている。

> 全員が職場から離脱していく様を眺め、いい知れない孤独を味わった。昨日まで、共に泣き、共に笑った愛すべき仲間、昨日まで深い絆に結ばれていた彼等が、急に遠い所へ旅立っていったような、それはやるせない寂蓼感であった。越えがたい断絶、あってはならない亀裂が、彼等の間に見る見る拡がっていくような、無限の孤独感であった。（高沢 1978: 48）

この闘争を機に高沢氏は、「子どもを育てる為に、どんなことがあっても、彼等との相互信頼を失ってはならない」と決心した。教育委員会から校長に対し、「職員の私宅を廻り、反省書の提出をさせるよう」指導があったが、高沢氏は、職場分裂を避けるため、「これをはっきり断った」（高沢 1978: 49）。こうした校長の理解や信念によって、職場の分裂が回避され、尺炭小の教員たちは、それまでと同様に組合活動や教育実践を展開できたのである。

高沢氏は、「10.21 闘争」の翌年、1967（昭和 42）年３月に尺炭小を去った。そして、多くの尺炭小教員たちも同じく尺炭小を去っていった。前述の大山氏も、「10･21 闘争で処分されて、私たち（のちの夫、渡辺五郎氏）も、霧多布小に左遷された」。その２年後、高沢氏は、「尺別炭砿小学校 50 周年記念誌」に、つぎの詩を綴っている。

> 「尺炭の仲間たちよ」
> 尺炭の歴史は　水のように流れ／次第に私から遠いものになりつつあるが／今日は明日のために／明日は未来のためにあると／みんなが一つの星を抱いて進んだ／あの充実した日点の連続―／ああ―尺炭教育の鮮烈な映像は／いつも私の心に回帰し／私の心の砦となってくれる／歌声をともにした仲間たちよ／今も真実を探る　澄んだ瞳の仲間たちよ／傷つきあった心を慰めあった仲間たちよ／愛しあうことの美しさを知った仲間たちよ／仲間をささえる腕の確かさを知った仲間たちよ／壁があればそれを乗り越え／断絶があればそれを埋め／盃があれば酌み／共に笑いそして泣いた仲間たちよ／時には遠く旅をし／いつも共感を連帯の輪の中で育ててきた／仲間たちよ／若葉の風の中で触れた君の女心／積乱雲を望んで訴えた君の男心／霜の夜しみじみと打ちあけてくれた君の愛の孤独／オリオンの傾むく夜に後から上着を着せてくれた君の優しさ／その一つ一つが／宝石の雫のように／私の心に今も熱く　したたり落ちる／ああ、その仲間たちは／胞子のように散っていった／君は東に去って　霧の中に棲み／君は西に去って　緑の天を飛翔し／君は南の花園に　純愛を育て／君は北の荒磯に　昆布のようにしがみつき／やがて荘をとして／風の中で歳月が流れ／君たちは次第に老

[13] 「総評、公務員共闘規模のこの闘いは、ベトナム戦争反対、賃金大巾引上げなどの目標を掲げ、生活と労働基本権の奪還を指標に、大規模に闘われた闘争で」、「先生方にとって」「初めての自前の闘いであり、釧路支部の参加率は 76%を越え、教組にとっても画期的な闘いであった」（高沢 1978: 47-8）。

いていくが／尺炭の思い出は／誇り高き人生の記録として／君たちの胸にバッジのように／いつまでも光り輝やいていくであろう／変革と創造のための絶えまない討議／汗で綴ったレポートの数々／理論と実践の一つ一つの重みは堆積となって／尺炭教育の地層の中で／確かな君たちの歴史の証しとして／いつまでもいつまでも残っていくであろう

（尺別炭砿小学校 1969: 12-3）

４－２．尺炭中における集団主義教育――学級づくり、生徒会活動、計画学習

同じく尺炭中においも、活発な組合活動と集団主義教育が展開された。1962（昭和 37）年に新卒で尺炭中に赴任した編田文男氏（1962-67 年勤務）は、初年度に「学テ闘争で毎日遅くまで会議をやり、決着がつかなければ、次の日の朝７時に集まることがあった」と振り返る（2017 年３月編田氏インタビュー）。こうした組合活動を主導した北明広次校長（1962 年度北教組釧路地区協議会委員長）は、生徒たちを「学校の主人公にする」という目標を掲げて集団主義教育を展開した。以下では、初任校として尺炭中に赴任し、生活指導の学習会にも参加していた編田文男氏ならびに川端紀一氏（1963-70 年勤務）のインタビュー記録と、当時の生徒会機関誌をもとに、尺炭中における集団主義教育の実態をみていく。

４－２－１．学級づくり

当時の尺炭中における学級づくりは､「学級の仲間づくりをしっかりやる」という目標をもとに、尺炭小同様、「班づくり」、「核づくり」、「討議づくり」が進められた（2017 年３月編田氏インタビュー）。尺炭中同窓生の川端氏（９期生）は、初任校として母校に勤務し、初めて集団主義教育を知った。彼が尺炭中在学時（1950 年代）はもちろん、出身大学（北海道学芸大学釧路分校）においても「集団主義教育」について聞いたことがなかった。尺炭中では当時、ベテランの大竹三郎氏や豊島豊氏（尺炭中３期生）が主導となり集団主義教育が展開された。編田氏は、当時の教員らによる「学習会」について、以下のように振り返る。

新卒２年目（1963 年）に、尺炭中のリーダー的存在だった豊島先生が、全国生活指導研究会（全生研）の全国大会に参加し、その後の職場の有志（豊島氏、高本宗敏氏、辻日出男氏、川端氏、編田氏）による学習会で主導的役割を果たしてくれました。学習会は主に教育月刊誌の読みあわせでした。部活指導で疲れた体での夜の学習会はきついものがありましたが、私にとって学習会は、理論武装ができ、実践を磨く土台となり、貴重な財産になりました。（2018 年編田氏手紙より、括弧内は原文ママ）

そして、学級活動等の時間で「必ず班を作って、リーダーを決めて、生徒総会で議論されることよく話し合いをさせた」（2018 年３月川端氏インタビュー）。その際、教員は、生徒たちの議論が間違った方向に行かない限り誘導や修正せず、生徒らの意見を尊重した。

班活動の具体的な内容については、当時の生徒による作文から読み取れる。

「私達のクラス」（１年生男子）

私達のクラスは、７つのグループから、成り立っています。グループの１つ１つを紹介すると、タイガー、仕事は、レクリエーション。コンドル、仕事は、学習、整美。ポパイ、仕事は、えんとつそうじ、掲示。ビーバーは、映画、連絡、目標書き。アップライト、仕事は清掃、生活記録。タイアップ、仕事は、衛生検査、１日の言葉。生活記録というのは、私達が日常生活の中で、わからないこと、１日１日の反省を書いたりして、先生に出して、見てもらうのです。１日の言葉と言うのは、私達の日常生活の中で、とても役に立つ言葉を毎日黒板に書いてくれるのです。（尺別炭砿中学校生徒会編 1963: 14）

「ホームルームを語る」（３年男子）

３Ｂというクラスはクループ活動を主体として活動をしています。グループは、（中略）11グループに分かれています。これらのクループは仕事の分担を決めて、これを２週間こうたいで実行しています。だが、この仕事を進めることは大変むずかしく何回もやり直したこともあります。又、グループ活動の全盛時代は３Ｂの目標「一人の喜びがみんなの喜びとなり、一人の悲しみがみんなの悲しみとなる」にぴったりあった活動を見せていた。それに生活面だけでなく学習面においても、クループがかたまって学習しあったりして、本当にグループ活動が活発だった。（尺別炭砿中学校生徒会編 1963: 81）

このように、各学年・学級において班が組織され、班を軸に学校生活および学習が行われていた。ショートホームルームでは日直が、ロングホームルームでは議長が中心となり、班単位で１日の目標や反省、学校行事に関する討議などが進められた。実際、ほとんどの学級で「意見が出ない」「積極性がない」のが現状であったが[14]、生徒たちはより積極的な学級になるためにどうすればよいか模索するなかで、その意義を見出そうとしていた。つぎの生徒は、意見が活発に出るための方法とその意義について述べている。

「私達の HR」（２年女子）

一体どうしたら普段でも活発な意見が出、そしてみんなが協力し合える級になる事ができるでしょうか。それにはみんながもっと理解しあい、よく話し合う機会をみつけ、いつもわだかまりのない様にする事だと思います。こういう事は、口に表わすのは簡単です。しかしいざ実行となると、その前にもう少し考えなければなりません。具体的にどういうことかというと、学級全体を見守っていける立派なというか確かな考えを持っていく人が、みんなをより良い方に指導していくべきであり、又みんなもそれに協力することではないでしょうか。私達の学級では、新しくグループの編成、そして日直の仕事などについて、何時間も話し合いました。こういった話しあいこそたくさんもつべきであり、そして正しいきまりをつくるべきだと思います。おとなしい学級といわれている私達の学級、果してそれが正しいかどうかは、いろいろな面から判断することができるでしょう。新しく編成されたグループまだま

[14] 生徒会機関誌『あこがれ』「わが H・R を語る」コーナーに生徒たちの反省が書かれている。このコーナーは、年度によってタイトルが異なる。1961 年度「学級の横顔」、1962 年度「ホーム・ルームを尋ねて　１、２年」、1963 年度「わが H・R を語る」。

とまりがあるといえる段階では決してありません。でも学級の１人、１人が向上するためにも、又グループ学校、そして将来のためにも私達はがんばらなくてはならないと思います。（尺別炭砿中学校生徒会編 1963: 19）

上記の生徒は、「班づくり」、「核づくり」、「討議づくり」を肯定的に捉えているが、対照的に、教員らが進める学級づくりに、批判的な生徒もいた。つぎの生徒は、「教員」や「真じめ」なクラスを対置しながら、独自の解釈とスタイルで「真理」を求めると述べている。

「我がＨ・Ｒを語る」（３年男子）

「こらー。うるさいぞ」先生が真赤な顔で、つばをはきだすようにどなる。生徒、そう我々は、まだなおもさわぎつづける。（中略）「今の中学生は変に生意気だ」ってこんな者のあつまりなのかもしれない。また一見ドライであっても、かなりウエットな者もいるし、真じめな顔をして、じょうだんをとばす者もいる。かなり現代っ子の多いクラスだと思う。しかし、我々は真理求めて進めるクラスだと思う。完成されたクラスも必要だと思う。でも未完成な野生的なクラスというのも現代において必要だと思う。（尺別炭砿中学校生徒会編 1963: 82）

そして、この学級の良い例として、生徒たちが文句をいいながらも文集の原稿を書いてくる点を挙げ、「３Ｃの本当の良さは、皆にもわかってもらえないものでないと思う。これからの３Ｃの発てんを信じて終る」と結んでいる（尺別炭砿中学校生徒会編 1963: 82-3）。このように、いわゆる「真じめな」学級・生徒像とは異なるものの、自分たちの長所、短所を認識して「真理」を求め、改善しようとしていた。主体的に自己変革を目指すという点では、学級づくりの成果といえよう。

教員もまたこうした多様な学級を認め、長期的視点で学級づくりを進めていた。前述の大竹氏は、以下のように評価している。

どこのクラスをのぞいてみても、小集団活動の掲示物が目につく。仲よしグループや班づくりが乱れ咲いている。温室のような甘いクラス、病院の手術室のようなきびしさのクラス、そこでは点検や追求のメスがたしかな人間を育てる試みが営まれている。“学級つくり”それはいきの長いマラソンのようなもので、抜きつ抜かれつ、尺中を放解（ママ）の規律でおし進める姿だ。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 50）

４－２－２．生徒会活動

上記のように、各学級において議論された学校行事や校則等に関する内容は、生徒総会に上げられ、全校生徒で活発に議論された。教員たちは、学級討議と同じく、すべて生徒に決定させ、運営させる方針をとった。３年間生徒会を担当した編田氏は、生徒たちにすべて任せる方が教員たちの指導力と生徒たちへの信頼が要求され、編田氏自身、尺炭中で「鍛えられた」と振り返っている（2017 年３月編田氏インタビュー）。

たとえば、このころ男子の頭髪は「丸坊主」と校則で決められていたが、一部の生徒たちから校則改正を求める意見が出た。そこで教員たちは、生徒たちに学級討議や生徒会で議論させた。

そして、生徒たちは最終的に「長髪」を可とする校則に変更した（2017 年３月編田氏インタビュー）。そのほか、生徒会内に体育委員会、図書委員会、保健委員会、広報委員会、生活委員会、整備委員会、学芸委員会、映画委員会、購買委員会などの委員会が設けられていた（尺別炭砿中学校生徒会編 1962-4）。なかでも、特徴的なのは映画委員会である。この委員会が設置されるまで、中学生は月に２、３回程度の鑑賞が可能であったが、1961（昭和 36）年度に「映画のけんの横流し」「観覧の時の態度」が問題となった（尺別炭砿中学校生徒会編 1962: 36）。したがって、1962（昭和 37）年度に映画委員会が設置され、協和会館で上映される映画のうち、生徒が見ることができる「許可映画」を選択した。その内容について、初代委員長はつぎのように述べる。

> いままでになかった生徒の手で映画を選択したり、８ミリ映画をつくったり、券を発行したりするのが主な仕事でした。映画の選択は、第一番目に教養を高めるような映画、第二に娯楽的なもの、第三番目にはただなんとなく見たいというもの、この順序で選択し、○×△式で、○の多い映画からその月の許可映画にしました。（尺別炭砿中学校生徒会編 1963: 22）

もちろん、各委員会に担当教員が配置されていたが、基本的には生徒たちが自ら委員会活動を行っていた。ただし、学級のホームルーム同様に、各種委員会や生徒総会での積極性は必ずしもあったわけではなく、相互連携も十分でなかった。1962（昭和 37）年度に３年生を担任していた中島浩氏は、生徒会機関誌に以下のような厳しい指摘をしている。

> 現在の学校生活の中には、大変無駄なことが多い。それは、諸君も知っている通り週番やホームルームでやれ廊下を走らぬようにとか、教室内でさわがないようにとか掃除がどうだ、学習態度がどうだと、まるで小学校か、幼稚園なみのことが中学校で問題になっている。諸君は、この現実をどう考えているのだろうか。実に中学生としては、恥ずかしい日常生活ではなかろうか。もちろんこれらのことが、問題になるのは一部の生徒のためである場合も考えられるが、学校には、生徒会や、ホームルームがある。これらの機能がしっかりしていれば簡単に片付くことである。どうかこの組織を生かして、今までの問題点をすっかり解決してしまいたいものです。（尺別炭砿中学校生徒会編 1963: 39）

対照的に、翌年度から新たに開催された学校祭については、生徒、教員ともに肯定的な評価をしている。この行事は、生徒会行事の１つとして、生徒会が主導して開催された行事である。学校祭の前日には「PR を兼ねて」前夜祭が行われ、仮装行列がおこなわれた（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 24）。そして、学校祭では、「染め物、石の彫刻、絵画、習字、刺繍など多くの作品が展示された」「作品展」、ならびに裏方を含めて全員参加の「芸能祭」が行われた（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 24）。この行事に関して、同年の生徒会長は振り返りのなかで、「学校祭があらたなる型で、生れた事は、とてもうれしい事であった」、「学校祭を討議した生徒会の活発さは、僕にとって大きなファイトを持たしてくれました」と述べている（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 16）。

この学校祭について、教員たちも高く評価している。この年、尺炭中に赴任した編田氏は、卒業生へのメッセージのなかで、以下のように評している。

尺中にとって、みんなが果たしてくれたこともたくさんあると思うが、その中で特に大きなものが学校祭であったように思います。みんなの頭で考え、みんなの手で運営したことは、これからの尺中の進むべき道を開いてくれたということで高く評価したいです。これからも、あの学校祭の時のように手をたずさえ、共に頑張ってもらいたい。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 51）

また、前述の大竹氏も以下のように学校祭について高く評価している。

学校祭の新しい試みは、盛り上りを見せ、多くの教訓を残したようだ。芸能祭の会場問題で、もみにもんで真暗な屋体でのギリギリの採決の場はみんなの胸に深く焼きつけられた。尺中のエネルギーが、はじめて生徒会を通じてほとばしり出た感じ、そこには幼稚さや混乱があったにしても何もない平穏無事は感動を残さないものだ。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 50）

このように、教員たちは、学校行事を生徒主導で開催させ、生徒の主体性を身につけさせようとした。生徒のなかには、「生徒個人は生徒会々員として発展又は活動をするようになったのだろうか」と疑問を持つ者もいたが、この学校祭開催は、尺炭中生徒会の「大きな動き、又は発展になった」（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 24）。前述の編田氏は、こうした生徒の主体性を重んじる取り組みこそ、「尺炭教育の根幹」であったと回顧している（2017 年３月編田氏インタビュー）。

４－２－３．計画学習：テスト・成績主義への対応

さらに、学習面も生徒の主体性を重んじる教育が続けられた。このころ、音別町内の高校等進学率は、全国・全道的な高校進学率の上昇を反映して、５割を超えるようになった（北海道 1948-70）。前述の大竹氏も、「成績主義がどんどん幅をきかせてき」た状況下で、「『ペーパー・テストなんか真の学力でない』なんて悠長にかまえておれなくなりました」と述べる（尺別炭砿中学校生徒会編 1962: 80）。しかし、大竹氏は、こうした状況を危惧し、群馬県島小学校の実践（民主教育、「未来につながる学力」）を例に出しながら、学力の問題に関して以下のように述べている。

親も子も教師も内へ内へ眼がいってしまって、学問の喜びや誇りのためでなく、テストと合否への執念にだけとらわれてしまうんです。そんなところにはもう「未来につながる学力」なんて意味合いはまるっきりなくなります。進学テストのための勉強組から差引された就職組は、とかく荒れ果てた感情を処理しきれなくなり勝ちです。／ぼくは明暗２つの断層を対比させてみました。親も子も教師も辛い息苦しさを感じる時世です。そのことだけで勝ち負けをつけられたような狭い考えに立てば、いっそう息苦しくなります。「世の中で生きていく総体の力が学力」なんですから、これから大きくゆれ動いていく世界に人間の尊厳性を信じおおらかな気持ちで生き抜いていきましょう。／「未来につながる学力」とはみんなの幸福を約束する楽天的なものなのですから。（「未来につながる学力を求めて」、尺別炭砿中学校生徒会編 1962: 79-80）

こうした学力観は、「島小学校のことがときどき職員室で話題にな」っていたように、他の尺炭中教員にも共通していた（尺別炭砿中学校生徒会編 1962: 79）。当時、音楽科を担当していた村雲氏は、高校入試を意識した音楽教育を行うことに葛藤を覚えていたと以下のように振り返る。

> あの頃、高校入試は、芸能科（ゲイノウカ）とされる音楽、美術、体育、家庭科、技術・家庭も含まれていたので、芸能科で点数を取ることは、とても有利でした。だから、私も楽しいはずの音楽を、楽譜を読む練習や理論の勉強も疎かにできず、「これが音楽キライを作るのだな」と思いました。しかし、必要に迫られ、受験に向けて最低限度のことは悩みながらもやりました。（2017 年３月村雲氏インタビュー）

こうした尺炭中教員の教育観は、少なからず生徒たちにも伝播していた。1963（昭和 38）年度のある１年女子生徒は、以下のように記す。

> 私達はあと、２年間、中学校生活がのこっている。２年間ぐらいすぐきてしまう、そうしたらまた、いやな高校入試、私達の今の生活が、たのしいような、たのしくないような、へんな気持だ、ある先生が、「よその学校では、勉強、勉強ですごいがここの学校では勉強は楽だぞ」と言った。そしてその学校では、テストをして出きる順ばんに、紙に書いてはるそうです。考えると、こんな事は、ばかばかしいと思う。こういう事を、きくと、「私達の学校は、よいほうだなあ」と思った。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 33）

この作文からわかるように、生徒たちは、尺炭中教員が有する学力観や「未来につながる学力」と、高校入試にむけた学力形成の必要性との狭間で葛藤しているようすがわかる。

そこで、教員たちは、生徒の主体的な学習を促進するために、「計画学習」という実践をおこなった。毎朝、自習時間を設け、その日の学習目標を生徒自身が設定した。1964（昭和 39）年度に在学の１年生男子は、この年の生徒会機関誌に「計画学習を有効に」というタイトルで以下のような振り返りをしている。

> 朝、ＨＲが終って、１時間目が始まる前、８時35分から、９時５分までの30分間は、家庭学習、今日する学習の予習、今までわからなかった所などを、学習する、計画学習がある。計画学習というのは、前の日に明日の計画学習に何をやるかという事を、自分で決めてやる学習なのだ。（中略）計画学習の時には、グループがかたまって一緒に勉強をしています。この結果は、普段のテストの時に、良く表われています。教室の中、グループの中で、計画学習の時に一生懸命（ママ）にやっているクループの中の人達は、学力テストの時などは「あいつに負けてたまるか」などといっています。こういう人達は、テストの成績も、なまけている人よりも良くなっていると思います。これだけ計画学習は、だいじな時間なのです。（尺別炭砿中学校生徒会編 1965: 36-7）

このように、当時の尺炭中では、生徒たちに家庭学習も含めて計画を立てさせ、自主的な学習を身につけさせようとしていた。上記からもわかるとおり、向学心のある生徒たちにとって、効果のある取り組みだった。

しかし、上記作文の結論には、計画学習の時間を有効活用しないクラスメイトを例にあげて、「計画学習は騒ぐためにあるのではなく、自分で計画を立てて学習する時間という事を忘れないで、計画学習を大いに利用し、学力を高めるために努力して下さい」（尺別炭砿中学校生徒会編 1965: 37）と述べている。ほかにも、受験を控えた３年生であるにもかかわらず、計画学習の時間を有効に使わなかったという記述がみられる。

> 計画学習の時は、ほとんど先生がいないため、一部の人をぬかした他は、皆、ストーブのまわりでおしゃべりをしているか、教室内でさわいでいることが多いようです。あまりハッスルしすぎて、いつも先生には「けじめをつけれ」とどなられます。たまに先生がいる時は、ノートと教科書だけは机の上にありますが、頭の中は他の事を考えているので、ついむだ話が多くなります。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 64-5）

このように、計画学習が目標とする自主的学習は、必ずしも生徒たちに浸透していたわけではなかった。前述の大竹氏もそうした実態を把握し、以下のように生徒たちの自主的学習を促している。

> 世をあげて、進学準備のきゅうきゅうたるテスト体制の中にあって、尺中はあくまでも教育の本すじを旗印しに、補習や差別教育を一切拒否している。進学者と就職者が卒業の日まで互いに励まし合い、さらに友情のきずなを卒業後も決して手放さないことを誓い合っている。しかし、真の学力を身につけるために、まだまだなすべきことは多い。計画学習１つとってみても主体的な自己のものとして活用している生徒は何割いるだろうか。正しい意味の学力競争の空気をみなぎらせたいものだ。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 50）

このように、尺炭中では社会の趨勢に流されず、「教育の本すじ」を堅持し、「真の学力」や「正しい意味の学力競争」を追求されていたことがわかる。計画学習は十分に機能していたとは言い難いが、押し付けの教育ではなく、生徒の主体性を重んじる教育が展開されていた。

また、上記のように、教員たちは、生徒同士の「友情」や「きずな」を重視するため、「差別教育」を拒否し、進路別コースを設けなかった。中卒労働者が「金の卵」と言われていた当時、学級には、進学志望者と就職志望者がいたが、「進学組」「就職組」に分けず、卒業まで同じ中学校生活を送らせた。当時の３年男子は、学級のようすを以下のように記している。

> 卒業を前にして、就職や進学のことが、関心の中心となっていますが、その間になんのわだかまりもありません。愉快でひとなつっこい３B のクラスは、卒業後もきっと懐かしい思い出として生き続けるでしょう。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 66）

他方、教員からは、「11 月、12 月になると、進学組と就職組と自然と分かれ」「今まで仲良く付き合っていた友だち関係が少しずつ変化し始める」とみえていた（2017 年３月編田氏インタビュー）。進学か就職かだけでなく、移動地域も異なるため（本州への集団就職か釧路管内の高校等進学か）、両者のギャップは大きかった。

４－２－４．「絶対評価」の通知表

いずれにせよ、教員たちが生徒間の結びつきを重視し、学級編成やカリキュラムを検討していたことがわかる。加えて、このころの特徴的な試みとして、「絶対評価の通知表づくり」があった。相対評価が主流であった当時、「生徒の努力が報われるもの」、「生徒に励みを与えるもの」、「生徒の学習診断となるもの」にしようと、大竹氏を中心に取り組まれた（2018 年編田氏手紙より）。およそ１年にわたり、学習内容の精選と客観的評価方法が「何度も何度も検討・吟味され」、最終的に十段階で到達度を評価する通知表となった。学期末・学年末に通知表を手渡された生徒たちは、声を挙げて喜んだという。編田氏は、この取り組みについて、「まさに先進的だったと今も自負しています」と振り返る（2018 年編田氏手紙より）。

このように、尺炭中の教員たちは、生徒集団の主体性や結びつきを尊重し、質の高い教育をおこなうため、遅くまで会議や研究会を行い、先生同士厳しく指摘しあった。特に、尺炭中が初任校であった若手の教員たちは、尺炭中で初めて集団主義教育を実践し、その後、自身の教職生活に貫かれる教育理念や力量を獲得していった。そして、こうした活力ある若手教員と彼らをベテラン教員がリードし、集団主義教育が展開されたのである。

尺炭中の集団主義教育を主導した大竹氏は、卒業生に以下のようなメッセージを送っている。この年（1963 年）、同じ産炭地の三池では三川坑の炭じん爆発事故が起こり、アメリカではケネディ大統領が暗殺された。

> 暗いニュースが連鎖反応のようにつながっている。それでも世界は、明るい方向に進んでいる。青少年たちは、たくましく成長している。尺中は限りなく前進を続けている。150 名の卒業生が巣立とうとしている。／かきのけて、自分だけが、とくをする、そんな尺中ではなく、喜びも悲しみも、一つ輪になってわかち合い、みんなと仲良くし、みんなと共に前へ進む。／明るい尺中の未来がひらかれている。（尺別炭砿中学校生徒会編 1964: 50）

５．閉山、閉校にかけての尺炭教育

1960 年代後半になり、尺別炭砿の閉山が現実味を帯び出した。政府は石炭産業の撤退へと舵を切り、企業ぐるみ閉山を対象とした「特別閉山交付金」を盛り込んだ第四次石炭政策を打ち出した（1968 年度から）。これにより、各産炭地では大型炭鉱が相次いで閉山し（「なだれ閉山」）、生産量、労働者数ともに大幅に縮小した（矢田 1995）。尺別炭砿においても次第に閉山が噂されるようになり、従業員の早期退職が相次いだ。尺炭小・中学校では、閉山した他炭鉱からの転入があった一方、父親の離職による転校がしばしばみられた。そして、1969（昭和 44）年には、雄別炭砿茂尻炭砿が事故を起こしたのち閉山し（９月）、いよいよ尺別炭砿の閉山が現実的となった。

将来に対する不安が地域に渦巻くなか、尺炭小・中学校では、どのような教育が展開されたのだろうか。

５－１．閉山直前の尺炭小――創立 50 周年記念式典、さらなる発展を祈って

父母の教育理解や PTA 活動は、1960 年代後半においても活発であった。1967（昭和 42）年から尺炭小に赴任した湊由次校長は、以下のように振り返る。

> 冬になると教室にすき間風がはいって、ストーブをたいても、まだ寒い。「冬の授業参観はとてもつらいです」と父母は口々に言っていた。それでも参観日の出席は非常に良好であった。この父母たちの教育に対する熱情と支援があったからこそ管内に名高い尺炭教育が存在したのだとつぐづく思う。（尺別炭砿小学校 1970: 15）

授業参観の出席率の高さは、前述のとおり、戦前からみられた。炭鉱が衰退ムードになっていた 1960 年代後半においても父母の教育に対する関心が維持されていたことがわかる。湊氏が指摘するように、この「熱情と支援」も尺炭教育に不可欠であった。

しかし、1969（昭和 44）年に入り、茂尻炭砿の事故と閉山を経て、尺別の閉山が現実的になった。そのようななか、尺炭小では同年 9 月に PTA が主導して創立 50 周年記念式・祝賀会を盛大に開催した。そこで、湊校長は、改めて PTA による支援に感謝している。

> いつの間にか、すきま風のようにはいりこんでいた炭砿斜陽の気はい、嵐となって吹きまくった。尺別炭砿がその例外として置かれるためには、現実はあまりにも冷血苛酷であった。／昭和 44 年 9 月 7 日。尺別炭砿小学校開校 50 周年記念式典は盛大におこなわれた。PTA・学校が一丸となり、２年間の計画準備が華やかに結実した。炭砿存続のため必死の努力を注いでいた砿業所も、進んで多額の寄付をしてくれた。全山の人々もこぞって支援してくれた。町当局は、苦しい財政の中から、50 万円の助成をしてくれた。／尺別炭砿小学校 50 年の歴史を祝い、その発展を願うことは、尺別炭砿 50 年の歴史を祝い、その存続を永久に願うことと同じであったのだ。／「ゆるがずたてり、万代遠く」と子どもたちも親たちも校歌をうたい願った、厳しゅくな中にも、何かつきつめた気持の固りをグイと感じさせられた。せめて（新）校舎の青写真でも作りたかったと PTA 会長が、しみじみと言っていたが、おそらくは炭砿全体の人々の心でもあったに違いない。この式典の情景を私は忘れはしない。（尺別炭砿小学校 1970: 15-6）

このように、砿業所、父母、全山の人びと、音別町は、閉山への不安を抱えながらも、尺炭小 50 周年を祝福し、記念式典を開催した。当時、「PTA 廃止論」が喧伝されていたが、尺炭小 PTA は、「子どもの教育は家庭、学校、社会を場とした教育が必要であり、その為には父母教師が一体となってこれに当らなければなら」ないと、PTA 活動の重要性を再確認している（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 15）。また、つぎの父母は、閉山に言及しながら、PTA 活動をより活発にしていこうと述べている。

石炭産業の盛衰と共に歩んで来た尺炭小学校、今、斜陽産業といわれ閉山のあらしに吹きまくられつつある尺別…。全く時代の流れほどおそろしいものはないと感ずるのは、わたし１人ではないと思います。／しかしながら、PTA に関することは、父母として、他産業に行こうが、当山に止まろうが、一生子どもが社会に巣立つまで、重要欠くべからざるものでしょう。PTA 活動の曲り角とか、大学スト等にも見られるように、教育の危機の時代です。／私たちは、より以上に PTA 活動を活発にし、子ども、教師それぞれの対話の中から各種行事活動から、私たちの次の世代を立派に成長させる基礎作りをしなければならないと思います。／子ども程、父母の心を敏感に察知するものは他にありません。閉山閉山で暗い心で居れば、子どもに影響することでしょう。手前みそのようですが、役員の方々は勿論、一般会員の方すべてが、役員の気もちで、明るく楽しい建設的な PTA 活動を通してのびのびとした子どもを育てようではありませんか。（開校 50 周年記念誌編纂委員会編 1969: 22-3）

父母たちは、尺別炭砿閉山の危機だけでなく、教育の危機にも言及し、子どもたちが父母や大人の不安を「敏感に察知する」ため、活発な PTA 活動によって「のびのびした子どもを育てよう」としている。父母、教員、子どもたちは、この記念式典で尺炭小の 50 年、尺別炭砿の 50 年を祝い、「万代遠く」発展を祈願した。しかし、この式典からわずか５か月後、閉山をむかえることになる。

５－２．閉山直前の尺炭中――継続される集団主義教育

一方、尺炭中でも 1960 年代後半になると生徒の転出入が相次いだ。学級で数名程度が転出する一方、転入生の急激な増加もみられた。前述の編田氏によれば、1966（昭和 41）年に転入が相次ぎ、学級を再編成して一学年５学級となった。彼らがどの地域から来たか定かではないが、本来持参するはずの「学習指導要録」もなく、「転出届けも出さずにそのまま来た、けっこう厳しい生活をしてきた子どもたち」に見えたという（2017 年３月編田氏インタビュー）。

こうした流動的な状況においても、尺炭中の教員たちは、それまでの方針を貫き、集団主義教育が展開された。閉校まで尺炭中に勤めていた前述の川端氏も「集団主義教育は閉山のころまで続いていた」（2018 年３月川端氏インタビュー）と記憶している。また、1967（昭和 42）年から閉校まで勤務していた松実寛氏によれば、当時の尺炭中のスローガンは、「平和を守る」や「真実を貫く」などであった。学級では「班を作って何かをするときも、つねに競争するため、団結するためにやる」雰囲気があり、生徒会活動を含め、生徒の主体的活動を促す教育が継続して展開されていた（嶋﨑・笠原編 2016: 30）。

ただし、生徒の記録によれば、班活動、生徒会活動ともに活気に欠けていたようである。この年の生徒会記念誌『あこがれ』第 18 号の「座談会　想い出を語る」コーナーで、３年生が生徒会活動について以下のように振り返っている。

A 男：生徒会活動が全体的に不活発。

B 男：３年間やってきたが、２年の時より１年生の時の方が一番活発だったと思う。２年になると生徒会活動がどうでもよいという気持ちになる。１年の時はやってみたいとい

う気持ちであったが、やはり面白くないので、つい、やらなくなってしまうのが原因の１つだ。

（尺別炭砿中学校生徒会編 1970: 28）

また、学級ごとの班活動については、ほとんどの学級で「不活発だった」と反省が述べられている。３年生のあるクラスでは、「集団力を示せる活動的な明るいクラスをめざして前進しよう」というスローガンを設定したが、「みんなで腰をすえて真剣に話し合ったことも少なく、何の疑いももたず過してきた学級だったかも知れません」としている（尺別炭砿中学校生徒会編 1970: 31）。同じく２年生のあるクラスでは、学級目標として「（１）計画をもって真剣にとりくもう。（２）自分の仕事や言動に責任をもとう。（３）みんなで考え行動しよう。（４）常に目標を持とう」の４つを設定したうえで、「小さな集団から学級を高めよう」と班を編成し、「初めは意欲を持って取り組んだ」。しかし、「実際の生活でこれを具体的に計画し点検でき」ず、「本当に学級をよくしていこうという１人１人の積極性に欠けた」ため、「目標まで到達できませんでした」と振り返っている（尺別炭砿中学校生徒会編 1970: 31）。

そして、この年は地区別の「少年団」が復活したが（廃止年不明）、生徒は「思ったより活動がなかった」と振り返る。特に、生徒たちは「親子懇談会」でさえ人が集まらなかったと、親の無関心さを指摘している（尺別炭砿中学校生徒会編 1970: 28）。父母たちが子どもの教育に対して十分に関心を向けられないほど、閉山は、刻一刻と近づいていた。

５－３．閉山から閉校にかけて

５－３－１．尺炭小教員たちの対応

閉山のとき、1970（昭和 45）年２月現在、尺炭小の児童数は、587 名であった。その後、怒涛のように児童らが転校していくなかで、尺炭小の教員たちは、どのような対応をとったのだろうか。閉校当時、校長事務取扱として、陣頭に立っていた佐藤潔氏は、閉校記念誌のなかで、つぎのように振り返っている。

学年末そして学年始めを迎えるにあたって、学校はどう閉山に対処すべきかを、いろいろと相談しましたが、教育の目標なり、基本的方針は平常年度となんら変わるものではない。地域全体が極めて不安定な状態の中での教育条件は最悪である。学校は子どもたちにとって最もおちついたあたたかい安住の場でなければならない。そしてこの子どもたちはやがてどこかの学校に移ることになるが、決してひけ目を感じないように、自信と勇気を持たせなければならないと、決意を新に 45 年度の教育計画を立てて、力強く１学期を踏み出したわけであります。（尺別炭砿小学校 1970: 10）

しかし、閉山の影響は、佐藤氏はじめ教員たちの予想を大きく超える「悲惨さ」であり、「いざ現実に直面してみて、あまりに影響が大きく、そしてその深刻なことに驚くばかり」だった（尺別炭砿小学校 1970: 10）。児童の転校が相次ぎ、「二度三度と学級編成替え」が行われた。さらに、教員自身の転勤も重なり、「児童会活動や学校行事などほとんどその機能麻痺の状態」となった（尺

別炭砿小学校 1970: 10)。佐藤氏は、閉校に際し、「後に残る子どもほど多くの動揺を与えたことは、大変申し訳なく存じます」（尺別炭砿小学校 1970: 10）と述べている。

一方、こうした急変期においても、父母・地域の支援があったと佐藤氏は以下のように述べる。

> 地域の不安定化による公徳心の欠如によって、学習意欲の減退とあわせて、非行化するのではないかということを一番恐れて特に意を注いで参りましたが、父母・地域の方々の特段の配慮によって、子どもたちは、とても元気に明るく、厚い友情に結ばれて今日（引用者注：閉校）を迎えたことは大きな喜びとするところです。（尺別炭砿小学校 1970: 10）

ここでは、父母・地域による具体的な支援は明示されていないが、子どもたちが閉校記念誌の作文で言及している、居住区の集約（学校に近い錦町への移動）や父兄も参加した小中学校合同の運動会と推測される。このように、尺炭小は閉山後も児童たちを第一にした父母提携の教育を展開し、1970（昭和 45）年 7 月 20 日に 50 年の歴史に幕を下ろした。

５－３－２．尺炭中教員たちの対応

他方、尺炭中においても、松実教頭を中心に通常の教育方針で臨もうとした[15]。松実氏は、急変する地域と学校環境のなかで、子どもたちに不安を抱かせないよう努めたと、閉校記念誌に記している。

> 「きょうは誰と誰が、明日は誰が転校して行き、そして私は…」と生徒達が考える異状な環境の中で、学級づくりはどうするか。それを授業とどう結合させて、沈滞し勝ちな子供達を本当に生き生きとさせるか。家に帰ると「うちはいつ行くの、おかあさん。みんな行ってしまうので僕も早くどこかへ行きたい。」とせがむ子供達に、ほんとうに“残っていてよかった”と思わせるために我々は何をなすべきかなどということが、４月以来の週間反省会・研修会・授業研の中で話し合われた。（尺別炭砿中学校編 1970: 8-9）

同じく閉校まで勤めていた川端氏も、「残った生徒に対して、閉山は現実なのだが、学校ではその意識をさせなかった」（2018 年３月川端氏インタビュー）と回想している。こうして、可能な限り通常通りの学級・教科担任、教科時間表が組まれた。しかし、教職員の転出が相次ぎ、５月には学級編成と教科担任の変更が行われた。その他、校外指導、修学旅行、生徒会、クラブ活動、「事実上壊滅した PTA に何がとって代り得るか」など、「課題は枚挙にいとまがなかった」（尺別炭砿中学校編 1970: 9）。それでも、教員たちは「『子供達をこれ以上みじめにしない』ことを中心にすえ」（尺別炭砿中学校編 1970: 9-10）、給食や修学旅行、春の遠足、そして、小中学校合同運動会を実施した。生徒数が減少して、校内清掃が困難になってからは、「学級担任以外の全教職員が、いくつかの清掃区域を生徒の手をわずらわすことなく受け持ち、放課後一斉に雑巾を持った」

[15] 松実氏による閉山・閉校に関する回想は、嶋﨑・笠原編（2016）参照。ここでは、主に当時の記録として、尺別炭砿中学校編（1970）の内容を記述している。

（尺別炭砿中学校編 1970: 9）。彼らは、「生活条件の悪化の中で、年度途中の転勤の不安に耐え、様々の(ママ) 教育課題」に取り組んだ（尺別炭砿中学校編 1970: 10）。

しかし、教員から見ても、子どもたちにとって「本当は何もかも去年までと随分違ってい」た（尺別炭砿中学校編 1970: 9）。松実氏は、閉校にあたり、「開校以来百余名に及ぶ先輩教職員が築き挙げた輝かしい尺中教育の最後の担い手として――しかし、いま心残りなことはあまりにも多い」と総括している（尺別炭砿中学校編 1970: 10）。

同じく、尺別炭砿の閉山と尺炭中の閉校は、同窓生たちにも衝撃だった。尺炭中の卒業生であり、閉山当時、同校で教鞭をとっていた川端氏は、母校の最後を見届け、去りゆく生徒たちにつぎのようなメッセージを残した。

> 「国破れて山河在り、城春にして。・・・」の心境そのものであり、故郷が、母校が姿を消してしまおうとも、生徒会活動の中で長く歌い続けた「一人一人がまゆあげて　つらい仕事を切りひらき」／「人あまさず輪になって　どんな時にもくじけずに　いつも明るく助け合う」（「生徒会の歌」より抜粋）ことの大切さを胸に秘め、いつまでも強くたくましく生きんことを望みつつ…。（尺別炭砿中学校編 1970: 33）

こうして、2,677 名の卒業生を輩出した尺別炭砿中学校は、1970（昭和 45）年 7 月 20 日に閉校し、23 年の歴史に幕を下ろした。

６．おわりに

本報告書では、学校資料や元教員へのインタビュー・データをもとに、尺別炭砿地域で展開された「尺炭教育」を概観した。わずか半世紀の教育史であったが、非常に濃密な実践が展開・蓄積された。炭鉱開基のころ（戦前）からすでにみられた尺炭教育は、戦争直後の混乱期に、父母・会社を統合する形で確立し、炭鉱発展期（～1950 年代）から衰退期（および教育界の変動期、1960 年代）、さらに閉山・閉校まで継続した。その間、尺炭教育は、釧路管内の先進的・独創的教育として注目されてきた。

道東の山間という地理的制約のなか、なぜこのような独創的かつ先進的な教育が成立したのだろうか。その要因として、以下の２点が指摘できる。第一に、熱意ある主導的な教員と教員同士の団結・連帯である。戦前、学校教育の定着を図った紅林鐵雄校長をはじめ、歴代校長は、各時代の課題を克服するため、強い指導力のもと教員たちを統率した。一方、一般教員たちも一貫して児童生徒の主体性と団結を第一にした教育をおこない、学年・教科を越えて、教員同士で連携しながら、さまざまな教育実践に取り組んだ。

第二に、父母や会社の教育理解・関心の高さが挙げられる。戦前から父母の教育に対する関心は高く、会社も学校教育に協力的であった。戦後、PTA 活動や社会学級が盛んに行われ、父母や会社は子どもと教員たちのために学校環境の整備を支援した。無論、教育理解・関心には、階層差や時代差がみられるが、全体として閉山・閉校にかけて一貫した教育理解・関心の高さがみられた。

このほか、尺別の地理的・歴史的要件（山間の炭鉱地区という閉鎖性と完結性、職住近接、早期の戦後復興）ならびに産業特性（父兄の職業構成が単一）も、尺炭教育の成立・継続に不可欠な要因であったと推測される。さらに、本報告書で取り上げた教員の多くが尺炭小・中学校出身（「尺別炭砿の子ども」）であった点も特徴である。今後、他の地域における教育実践との比較を通して、より詳細な検討が求められる。

このように先進的かつ独創的な尺炭教育は、尺別炭砿の閉山と尺炭小・中学校の閉校とともに、その歴史に幕を下ろした。しかし、尺炭教育の「伝統」や「真価」は、尺炭小・中学校で教鞭を執った教員たちや教えを受けた同窓生たちによって継承されている。教員たちは、尺炭での教育実践や生活経験をもとに、釧路管内はもちろん、全道各地の教育実践をリードしていった。教育に関する時流の変化、地域、学校（職場）環境の違いから、必ずしも尺炭と同様の教育を展開できたわけではなかったが、形を変えながら精力的な実践を継続していった。尺別出身で、尺炭中で教鞭をとった吉田範正氏は、閉山に際し、尺炭での経験を以下のように位置づけている。

> 尺炭教育の伝統が根ざし、積み上げ、造られていった、幾多の前途有為の青年を社会に送り出していった、母なる尺炭中が、今将に消えんとしている。現代のきびしさをまざまざと見せつけられた思いである。／私の生れ故郷尺炭は、炭砿と運命を共に今消えようとしている。そして私を教師としてきびしく育て上げてくれた尺炭中学校も今歴史の幕を閉じようとしている。／「故郷は遠きにありて思うもの」誰かの詩の一節にあったがみじめに消えていく故郷の姿をまざまざとこの目で見るより、遠くにあって静かに偲ぶ方がまだ幸せなのかも知れない。尺炭中よ、静かに眠り給え、たとえその姿は地上より消えても、輝やかしい尺炭中の足跡は、管内教育史の一頁の中にさんぜんと輝やいているだろう。（尺別炭砿中学校編 1970: 6）

尺別での経験は、教師としての吉田氏にとって重要な意味をもっており、加えて、「尺炭教育」それ自体が管内の教育史に「輝いて」残るものであると述べている。

一方、戦後の混乱期に尺炭小の校長を務めた紅林晃氏は、尺炭教育を受けた子どもたちこそ、尺炭教育の「真価」を示すものであると期待している。

> もう、あの学校は閉山でなくなっています。学校はなくなったけれど、私達が行った教育のあとは、今、あの当時あそこで学び、あそこを巣立った子ども達が、この管内はもちろん、全道、全国に散らばってその時の真価を、教育の本領を、自分の生きた一つの働きを通して示してくれているものと私達は考えます。これが釧路の教育なのです。この釧路の教育の伝統を生かしていただきたいと思います。（紅林晃 [1981]1988: 64）

果たして、「尺炭の子どもたち」は、人生を通して尺炭教育の「真価」を示すことができたのだろうか。結論を出すには、今後、さらなる調査が不可欠である。しかし、われわれの研究グループがこれまでに出会った「尺炭の子どもたち」は、尺炭で学んだことを礎に、その後の人生を歩んできたようにみえる。特に、閉山やその他の困難を乗り越える際、尺炭教育で培った主体性が資源の一つになっていた（閉山時の中学生については、新藤ら（2018）を参照）。なにより、閉山・

閉校から半世紀近く経った今日において、活発な同郷会や同窓会活動を展開する「尺別の絆」は、尺炭教育で培った集団性や共同精神の賜物と言えよう。

すでに尺別炭砿地域は自然に還り、尺炭小・中学校の校舎は跡形もないが、「尺炭教育」は、全国に移った尺炭の教員たちや子どもたちによって、形を変えながらも受け継がれているのである。

謝辞

本報告書で使用した文書資料は、元尺炭小・中学校教員のみなさま、同窓生のみなさま、ならびに北海道立教育研究所からご提供いただきました。また、本報告書作成において、木幡一夫先生、坂野寅雄先生、村雲忠夫先生、編田文男先生には、内容に関するご助言をいただきました。尺炭小・中学校の先生方をご紹介下さった同校同窓生のみなさま、釧路市立博物館学芸員石川孝織氏はじめ、関係者のみなさまに改めて感謝申し上げます。

参考資料・文献

青井和夫，1958,「集団教育論」『教育社会学研究』13: 134-51.

開校 50 周年記念誌編纂委員会編，1969,『尺炭小 50 年の足跡』尺炭幼小 PTA 広報委員会.

記念誌編集委員会編，2000,『尺別炭砿中学校 30 周年記念誌――あこがれ』.

北海道音別高等学校同窓会編，1988,『よみがえる群像――音別高校 11 年のあしあと』.

北海道音別高等学校生徒会文化部編, 1955,「あしあと」4（再録: 北海道音別高等学校同窓会編, 1988,『よみがえる群像――音別高校 11 年のあしあと』：12）

北海道音別高等学校生徒会新聞部，1954,「標燈」4（再録: 北海道音別高等学校同窓会編，1988,『よみがえる群像――音別高校 11 年のあしあと』：34）

北海道 PTA 連合会編，1957,『道 P シリーズ第 3 集――第 4 回 PTA 研究大会誌』北海道父母と先生の会連合会.

北海道白糠高等学校創立 20 年史編集部編，1969,『創立 20 年史』北海道白糠高等学校創立 20 周年記念協賛会.

石川孝織・佐藤冨喜雄・福本寛，2012,「釧路炭田における戦時下『急速転換』――経験者の証言を中心に」『エネルギー史研究』27: 49-70.

木全清博，1984,「北海道における戦後初期社会科教育史――コア・カリキュラム運動を中心に」『教授学の探究』2: 175-92.

小森健吉，1958,「教師の職場づくり」『教育社会学研究』13: 86-98.

紅林晃，1948,「岩崎章君の実践に寄せる」（再録：紅林晃遺稿集出版会編，1988,『紅林晃遺稿集』17-20.）

――――，1981,「タンチョウ　その保護に尽くした人びと――特別天然記念物タンチョウ保護 30 年の歩み」（再録：紅林晃遺稿集出版会編，1988,『紅林晃遺稿集』58-71.）

紅林鐵雄，1967,『風雪八十有余年――涙と感激の自叙伝』.

釧路國教育研究所，1954,『教育研究集録』.

釧路教育研究所編，1963,『釧路の教育』7.

――――，1999,『釧路教育研究所創立 50 周年記念誌　想』.

釧路民間教育研究団体連絡協議会編，1983,『灯をもやしつづけて――釧民教 20 年の軌跡』.

釧路市地域史研究会・釧路市地域史料室編，2006,『釧路市統合年表: 釧路市・阿寒町・音別町合併１周年記念』釧路市.

宮坂哲文，1962,『生活指導の基礎理論』誠信書房.

音別町教育研究所，1961,『町研のあしあと――音研史』.

佐々木與吉，1988,「教育の原野を伐り拓いた使徒――紅林晃氏の教育人生」紅林晃遺稿集出版会編，1988,『紅林晃遺稿集』373-404.

嶋﨑尚子・笠原良太編，2016,「尺別炭砿の閉山と子どもたち――元尺別炭砿中学校教頭松実寛氏による講演の記録」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』７.

嶋﨑尚子・新藤慶・木村至聖・畑山直子・笠原良太・石川孝織，2017,「尺別炭砿で暮らした人びと調査（１）――2016 年度東京尺別会調査報告書」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』10.

清水幸正，1960,「学校と地域との組織化の問題」『教育社会学研究』15: 55-70.

新藤慶，2015,「産炭地における子どもの姿と教育実践――1950 年代～1960 年代前半の研究をもとにして」『群馬大学教育実践研究』32: 123-34.

新藤慶・嶋﨑尚子・石川孝織・木村至聖・畑山直子・笠原良太，2018,「中学生からみた尺別炭砿の学校生活と閉山の影響――尺別炭砿中学校 23・24・25 期生の座談会記録」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』14.

尺別炭砿小学校，1965-6,『職場史』１-２.

――――，1970,『尺炭小沿革の概要』.

尺別炭砿中学校，1957,『開校 10 周年記念誌――10 年の歩み』.

――――，1970,『地底の灯――尺別炭砿中学校廃校記念誌』.

尺別炭砿中学校生徒会編，1962-64, 70 年,『あこがれ』10-12, 18.

尺別炭砿中学校第４期同窓会，1995,「還暦故郷の旅」.

高沢慶次郎，1978,『この空に虹をかけて――ある校長の記録』高沢先生を励ます会.

でか・ちび・のっぽ編集委員会編，1966,『でか・ちび・のっぽ』尺別炭砿小学校.

鰐淵俊之，1995,「不撓不屈」（尺中４期同期会資料）.

◆

尺炭教育史

尺別炭砿地域における独創的な教育実践の記録

（JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.15）

◆

発行日：2018 年 10 月 1 日

◆

著者：笠原良太

発行者：産炭地研究会（JAFCOF）

http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/

◆

本報告書は、2016～2018 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 C）『第4次石炭政策下での閉山離職者家族のライフコース: 釧路炭田史再編にむけた追跡研究』（課題番号・16K04111 研究代表者・嶋﨑尚子）による研究成果の一部である。